

清末小説から 154

2024.7.1

『時務報』掲載「審断喀律致死事」について——日本横浜カリユ毒殺事件……………樽本照雄 1

蘆花『外交奇譚』の漢訳(中)……………沢本香子15

薛一謬、冷雲、廖旭人三譯者翻譯原作鑑定(上)……………古 二 德33

清末小説から33、41

★古二徳論文は本号と次号の連載です。沢本香子論文は次号完結を予定しています。ご期待囀

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

『時務報』掲載「審断喀律致死事」に

ついて

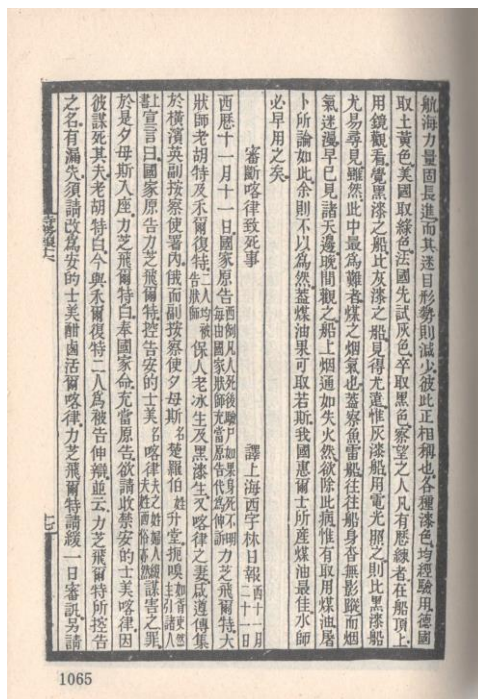
——日本横浜カリユ毒殺事件

樽 本 照 雄

『時務報』掲載の「審断喀律致死事」について説明する。清末小説研究会ウェブサイトにて次の文章を掲げた。

2024.2.3

張坤徳訳「審断喀律致死事」(『時務報』第16-23冊 光緒二十二年十二月初一日・光緒二十



張坤徳訳「審断喀律致死事」
『時務報』第16冊 1897.1.3 影印本

三年三月十一日/1897.1.3-4.12)があります。
『時務報』といえは刑事物語1篇(原作不詳)

と最初の漢訳ホームズ4篇を掲載したことで有名です。

周潔はその「審断喀律致死事」をあげて今までの研究者が無視した探偵小説だと指摘しました。該誌掲載の探偵小説が5篇から6篇に増加します。漢訳ホームズ系統ではないにしても同類だというわけです。従来にはなかった新しい見解だということができます(周潔「中国近現代司法変革の文学反映——略論中国偵探小説興起的社会背景及多重意义」『文学評論』2022年第4期 2022.7. 98頁)。

その後、『時務報』の刑事物語1篇と漢訳ホームズ4篇の合計5篇を収録する『新訳包探案』(素隠書屋1899)が出版されました。それに「審断喀律致死事」は見当たりません。理由はいたって簡単です。探偵も刑事も登場しない、つまり探偵小説ではないからです。日本横浜において実際に発生した毒殺事件の裁判記録にほかなりません。漢訳題名の「審断喀律致死事(カリュー致死事件を審理する)」が裁判に重点を置いた報道記事であることを表わしていま

す。

事件の大意はつぎのとおり。

明治時代、イギリス人のカリュー(Carew)夫妻が日本横浜に住んでいました。1896年、カリューが死亡するとヒ素による殺人ではないかと疑われます。被疑者は妻のイーデスです。在日本イギリス領事館裁判所における審理の結果、イーデスに有罪判決(死刑)が下されました(後日談:終身刑に減刑ののち香港を経由してイギリスに移送、大赦により出獄、1958年イギリスにて死去したという)。

イーデスはイギリス名門出身の女性でもありましたからカリュー毒殺事件は人々の注目を集めました。そのニュースは英語圏の諸外国にも拡散したのです。

裁判の状況は日本刊行の英字新聞が詳細に報道しました。それを上海の英字新聞『(西)字林日報』が転載し、それをもとに上の漢訳になったと考えられます。

(参考文献:徳岡孝夫『横浜・山手の出来事』文藝春秋1990.1.25)



ポーチー家、1884年ころ

16歳前後のイーデス(右端)

ROGER PARSONS“VICTORIAN EDGARLEY—THE FALL OF THE HOUSE OF PORCH” ネットより





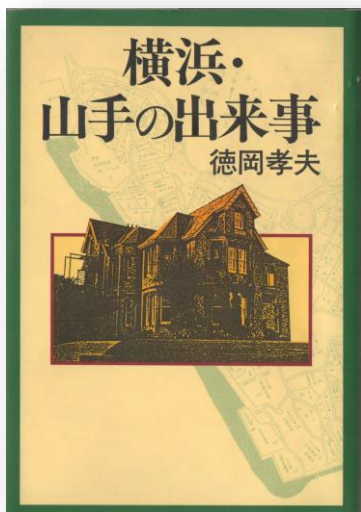
1897年ころ
ウェブサイト FAMILY SEARCH



Mrs. Edith Carew
MRS. EDITH CAREW "THE EVENING TIMES"
WASHINGTON, 1897.2.9



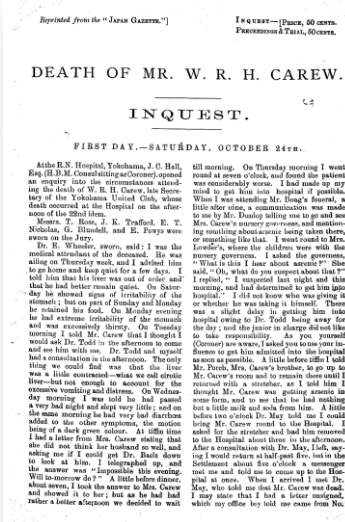
Mrs. Edith May Carew, Who Was Convicted of Poisoning Her Husband.
MRS. EDITH CAREW "THE SAN FRANCISCO EXAMINER" 1897.2.14



徳岡孝夫単行本



文庫本



DEATH OF MR. W. R. H. CAREW

以上はカリエー事件裁判の大きな流れだ。
知られているようにイギリスは日英修好通商条約(1858)により日本国内における領事裁判権を得ていた。日本に在住するイギリス人が関係する事件についてはイギリス領事館裁判所が裁く。その治外法権は1899年に消滅する予定だった。しかしカリエー事件はそれ以前の1896年に発生したため横浜イギリス領事館裁判所で裁判が行なわれた。
本稿では張坤徳の漢訳について検討する。ひとことつけ加える。カリエー毒殺事件の犯人は

追及しない。関連して怪しいイギリス女性の登場で事件の謎が深まっているがそれにも触れない。張坤徳が英文による裁判記事全体をどのような方針で漢訳したかを具体的にみるのが本稿の主旨だ。

日本発の裁判記事

日本横浜で死去したカリエーの本名はウォルター・レイモンド・ハロウェル・カリエー(Walter Raymond Hallowell Carew, 1853-1896)という。ハロウェル・カリエーが姓だ

(徳岡359頁)。イーデス・メイ・ポーチ (Edith May Porch, 1868-1958) は15歳年上の殖民地公務員であるその男性と結婚してハロウェル・カリュー姓 (以下カリュー) となる。名門出身で財産のあるイーデスは資産を持たないカリューの夫人になった。彼女の結婚は親から必ずしも祝福されたものではなかったらしい (徳岡365頁)。夫妻はシンガポール、マレー、香港を経由して日本にやってくると横浜の山手外国人居留地 (ブラフ The Bluff) に居住する。カリューはイギリス系社交場の横浜ユナイテッド・クラブの支配人となり彼の屋敷では多数の使用人を擁していた。

夫が突然に死去して夫人が殺人の容疑で裁判にかけられたことは述べた。カリューは病気治療にヒ素剤を常用していた。死因がヒ素中毒であるから毒殺事件である。当時カリュー夫人のイーデスは28歳だった。

横浜でのカリュー裁判を詳細に記録した英文資料が存在する。『W・R・H・カリュー氏の死 DEATH OF MR. W. R. H. CAREW』 (1897) という。英字新聞『ジャパン・ガゼット THE JAPAN GAZETTE』に掲載された裁判報道記事をまとめたもの。審問開始の1896年10月24日から翌1897年2月1日判決までの全日程を収録する (以下、集成本。また別に“THE CAREW CASE; ARREST OF MISS JACOB”全23頁がある。巻末24-25頁に新聞切り抜きあり。いずれもウェブサイト HARVARD LIBRARY 所収)。ゆえに該書の刊行は判決日以降だと推測される。

上海で発行されていた英字新聞『西字林日報』 (また『字林日報』。以下、上海英字新聞) と集成本の関係を考察するとき刊行年月が手がかかりになる。上海英字新聞は集成本の出版より以前に日本横浜での裁判記事を掲載している。そこから上海英字紙が材源としたのは集成本ではないとわかる。使用したのは日本で発行された新聞本紙そのものだった。

問題がひとつある。現在その上海英字新聞の実物がなにか不明である。『ジャパン・ガゼット』の記事との比較対照を直接行なうことができない。そこで次善の策をとる。張坤漢訳を検討するに際し本稿では集成本を使用する。集成本の内容はもとの新聞と同じだと見ているからそれほど的外れではないはずだ。上海英字新聞については今後の研究を待つ。

張坤漢訳の掲載情況

「審断略律致死事」は8回にわたり『時務報』 (第16-23冊 1897.1-4) に連載された。該誌の目次および本文冒頭には「桐郷張坤漢訳」と記載する。

張坤漢が担当するのは英字新聞の記事を選択して漢訳することだ。その漢訳欄は名称が変化している。第1冊「域外報訳」、第2冊「西文報訳」を経て第3冊より「英文報訳」となる。そこに複数篇を集めて掲載する。例を示せば第16冊には「英国商務公所長倡言中国進口税之宜加 (イギリス商工会議所長が中国の輸入税増徴を提唱する)」とか「論中国為各国所垂涎 (中国が各国の垂涎の的になっていることを論ずる)」などがある。海外事情を紹介するのが目的だ。

張坤漢がそれぞれの記事について解説することはない。漢訳することに徹底している。張坤漢はその「英文報訳」欄を第32冊まで担当した。

該誌に小説欄は最初から設定されていない。刑事物語1篇および漢訳ホームズ4篇についても新聞記事扱いだ。「訳歇洛克呵爾唔斯筆記 (シャーロック・ホームズ筆記を訳す)」「滑震筆記 (ワトスン筆記)」と記述してホームズとともにワトスンも実在の人物だと認識している。原作者のコナン・ドイルの名前は出していない。

「英文報訳」欄は原則として材源となった新聞とその刊行月日を明記する。例外は漢訳ホームズものだ。関連していえばその漢訳ホームズ

ものについて漢訳者は張坤徳ではなく曾広銓だと主張する研究者が出現した。これについては別稿で論じる。

旬刊『時務報』の連載状況と使用された英字新聞名およびその日付を抜き出す。実際の裁判(仮に第1-3段階と称する)を報道した記事の漢訳である。裁判については後にのべる(＊と傍点は筆者)。

第1段階 死因審問 DEATH OF MR. W. R. H. CAREW. INQUEST. 5回 (1896.10.24-11.6)

漢訳なし

第2段階 予備審問 MRS. CAREW CHARGED WITH MURDER. 6回 (1896.11.11-18)

第16冊 光緒二十二年十二月初一日 (1897.1.3)
／訳上海西字林日報 西十一月二十一日

第17冊 光緒二十二年十二月十一日 (1897.1.13)
／訳上海西字林日報 西十一月二十一日

第3段階 公判 TRIAL. 21回 (1897.1.5-2.1)

←＊上海英字新聞の日付と齟齬がある

第18冊 光緒二十三年正月二十一日 (1897.2.22)
／訳上海西字林日報 西十一月廿一＊

第19冊 光緒二十三年二月初一日 (1897.3.3)
／訳上海西字林日報 西十一月廿一＊

第20冊 光緒二十三年二月十一日 (1897.3.13)
／訳上海西字林日報 西十一月廿一＊

第21冊 光緒二十三年二月二十一日 (1897.3.23)
／訳上海字林日報 西十一月廿一＊

第22冊 光緒二十三年三月初一日 (1897.4.2)
／訳上海字林日報 西二月初一日

第23冊 光緒二十三年三月十一日 (1897.4.12)
／訳上海字林日報 西二月十一

張坤徳は裁判の第1段階である死因審問を漢訳しなかった。第2段階の予備審問と第3段階の公判を扱ったことがわかる。

上海英字新聞の日付に冠する「西」は西暦つまり新暦を表わす。『西字林日報』1896年11

月21日付、『字林日報』1896年11月21日付、同紙1897年2月1日および2月11日付だ。総合すると張坤徳は合計3日分の記事を漢訳したように見える。『西字林日報』と『字林日報』は日付の「西十一月廿一」を共有する。同一紙である証拠だ。張坤徳はそれらとは別に『字林西報 THE NORTH CHINA DAILY NEWS』(前身の『北華捷報 THE NORTH-CHINA HERALD』) 週刊版は附録となる)をあげている*1。

不審な点があることを指摘しておく。上の『時務報』第18-21冊には上海英字新聞の日付を明記して新暦11月21日とする(＊印)。しかしその裁判記事(第18冊)を見れば後の公判(1897.1.5)内容がすでに記述されている。時間的に矛盾する。＊印をつけた上海英字新聞の新暦11月21日は誤記だろう。翌年1月5日以降2月1日以前の複数の日付でなくてはならない。つまり張坤徳が実際に参照したのは3日をうわまわる複数の上海英字新聞だった。

カリュー毒殺事件裁判

日本横浜で行なわれたカリュー関係の裁判である。カリュー夫人を容疑者、被告として上のように3段階の順序を踏んでいる。もうひとつ容疑者として家庭教師メアリー・エスター・ジェイコブの裁判が並行して行なわれた。死亡したのはひとりだがふたりの女性がそれぞれ裁判にかけられるという異常事態だ。

カリュー夫人について見ていく。

最初にカリュー死去の原因を判定する死因審問(また検屍裁判)がある。5回(1896.10.24-11.6)開かれた。続く予備審問は6回(1896.11.11-18)だ。正式裁判に先立って審理するに足る証拠の有無を判定することを目的にする。第3段階の公判は陪審員を選出して全21回(1897.1.5-2.1)が開廷された。

くり返せばその新聞記事と漢訳を比較対照すると張坤徳が選択したのは予備審問と公判だ。

第1段階の死因審問は漢訳の対象とはなっていない。上海の英字新聞に掲載されていたかどうかは今のところ不明である。

漢訳は第2段階の予備審問から突然にはじまる。『時務報』にはそれが毒殺事件の裁判記録であるという説明はない。解説しないのが編集方針だ。初回は外国人の名前が多数出てきて読者には読みにくかったと思う。筋らしいものはないから明らかに小説ではないと了解しただろう。

漢訳されなかった死因審問1日目(1896.10.24)の報道を参考までに引用する。書き出しの部分である。

【英文】 At the R.N.Hospital, Yokohama, J.C.Hall, Esq. (H.B.M.Consul sitting as Coroner), opened an enquiry into the circumstances attending the death of W. R. H. Carew, late Secretary of the Yokohama United Club, whose death occurred at the Hospital on the afternoon of the 22nd idem. p.1

横浜の王立海軍病院において、J・C・ホール氏(イギリス領事が検屍官をつとめる)は、同月22日午後に発生した横浜ユナイテッド・クラブの故支配人W・R・H・カリューの死亡状況について取り調べを開始した。

裁判記事に頻出する「H.B.M.」は「Her Britannic Majesty 英国女王陛下」という意味だ。審問は王立海軍病院からはじまるがすぐにイギリス領事館裁判所に場所を移す。

審問開始の記事だからいくらかの情況説明にはなる。上海英字新聞に掲載されていれば張坤徳はそれを漢訳しなかったことになる。重複を避けたという見方もできるが、もともとなければそれは成立しない。どちらにせよ次の予備審問および公判でその都度同じ事情説明がくり返

される。死因審問は漢訳されなくてもかまわなかった。

漢訳の冒頭部分

予備審問の初日はあっさりとして終了した。審問は翌日に延期されたからだ。それにはそれで手続が必要だった。当時の様子を見るために冒頭の記事をいくつかに分けて英文資料と比較する(漢訳の頁数は影印本)。

【張坤徳】西歴十一月十一日。国家原告(割注:西例凡人死後驗尸如果身死不明每由国家状師充当原告代為伸訴)力芝飛爾特。大状師老胡特及禾爾復特(割注:二人均被告状師)保人老冰生及黒漆生。又喀律之妻。咸遵伝集於横浜英副按察使署内。俄而副按察使夕母斯(名)楚羅伯(姓)升堂。扼嗅(割注:如胥吏然主引諸人上書)宣言曰。国家原告力芝飛爾特。控告安的士美(名)喀律(割注:夫之姓婦人綴夫姓西俗亦然)謀害之罪。於是夕母斯入座。1065頁

西歴11月11日。国家の原告(割注:西洋の例では人の死後に検屍をして死因が不明であれば国家の弁護士(訴追人)が原告となつてかわりに訴追する)はリッチフィールドだ。弁護士ラウダーとウォルフオード(割注:ふたりとも被告の弁護士)および保証人ロビスンとハッチスン、さらにカリューの妻の全員が横浜のイギリス領事館裁判所に召喚された。判事補ジェームズ(名)トロウプ(姓)が出廷し、裁判所書記官(割注:文書係の役人で諸氏が文書を上程するのを主導する)がつぎのように宣言した。国家の原告リッチフィールドはイーデス・メイ(名)カリュー(割注:夫の姓。婦人が夫の姓をつづるのは西洋の風習)を謀殺の罪で訴追する。そうしてジェームズが着席した。

【英文】 FIRST DAY. — WEDNESDAY,

NOVEMBER 11TH.

In H.B.M. Court on Wednesday morning, before Jas. Troup, Esq. (Assistant Judge), a case, Henry Charles Litchfield, H.B.M. Crown Prosecutor in Japan v. Edith May Carew, was called on, the charge being murder. The Accused appeared on a summons.

Mr. Litchfield appeared for the Crown, and Mr. J. F. Lowder and Mr. A. B. Walford for Mrs. Carew. The Accused sat beside Mr. Lowder, and on her left were Messrs. J. D. Hutchison and R. B. Robison. p.45

1日目——11月11日水曜日

水曜日の朝、在日本イギリス領事館裁判所においてジェームズ・トロウプ判事補のもと、(原告)ヘンリー・チャールズ・リッチフィールド在日イギリス検察官対(被告)イーデス・メイ・カリューの殺人事件が起訴された。被告人は召喚状により出廷した。

リッチフィールド氏が原告として出廷し、J・F・ラウダー氏とA・B・ウォルフォード氏はカリュー夫人の弁護だ。被告人はラウダー氏の横に座り、彼女の左側には(保釈金拠出者)J・D・ハッチスン氏とR・B・ロビスン氏がいた。

予備審問のため出廷した人々についての記述からはじまる。

漢訳は直訳ではない。張坤徳は前後を入れ替えて独自の説明を加える。英文の内容をよく把握しているといえる。「扼嗅」はusherの音訳だ。裁判所で雑務を担当する廷吏を指す。訳語として「裁判所書記官」を当てた。

誤解している箇所は見えない。張坤徳が加筆説明したのは国家原告のこと、イギリス人は姓名を逆に表示すること、結婚すると女性は夫の

姓を名乗ること、裁判所書記官などについてだ。清末の読者にはなじみのない西洋の事柄だという認識によるのだろう。適切である。

死因審問ではカリューの死亡原因が問題になっていた。上の予備審問では被疑者がカリュー夫人であることが明確にされている。たしかに第1段階の死因審問をわざわざ持ち出さなくても裁判だということは伝わる。

『ジャパン・ガゼット』記者による説明はあるが部分的だ。裁判記録が主要部分を占める。裁判官、原告、被告、弁護人など関係者の発言によって記事は構成される。張坤徳漢訳では発言部分を示すために「白」「問」「供」「言」「曰」などを使用する。本稿の日訳では英文に合わせて記号「:」に置き換える。

【張坤徳】力芝飛爾特白。奉国家命。充当原告。欲請収禁安的斯美喀律。因彼謀死其夫。1065頁

リッチフィールド：国家の命令を奉じた原告として夫謀殺によりイーデス・メイ・カリューを収監することを要求します。

【英文】Mr. Litchfield: May it please your Honour, I appear under instructions from Her Majesty's Government to ask for the arrest of Mrs. Carew on the charge of the murder of her husband. I have laid before your Honour this morning the depositions, which you have— p.45

リッチフィールド氏：裁判官閣下、私は英国女王陛下政府の命令により夫殺しの容疑でカリュー夫人の逮捕を求めます。今朝、閣下に宣誓供述書を提出しましたが、それを……

裁判記録だから法廷での発言をそのまま記述する。張坤徳は発言者を明示しながら主要部分を文言で簡潔に漢訳した。上に続いて召喚状に記されたカリュー夫人の名前に間違いがある

ことが明らかにされる。

【張坤徳】老胡特白。今与禾爾復特二人為被告伸辯。並云。力芝飛爾特所控告之名。有漏失。須請改為安的斯美酣鹵活爾喀律。

1065頁

ラウダー：今ウォルフォードとふたりで被告のために弁護します。さらにいえばリッチフィールドが告発した名前に遺漏があります。イーデス・メイ・ハロウエル・カリューと訂正をお願いしなければなりません。

張坤徳は主要部分だけを取り出した。

裁判所では嚴重な手順を踏んでいる。それを写した英文はそれ自体が自然に長くなる。どういうものであったのか該当部分を示す。

【英文】 His Honour: Just a moment, Mr. Litchfield. Mr. Lowder, you appear—

Mr. Lowder: I appear with my friend Mr. Walford for the defence.

His Honour: Have you seen the summons, Mr. Lowder ?

Mr. Lowder: I have.

His Honour: Is the name of your client correctly stated there in ?

Mr. Lowder: No, it is not.

His Honour: What should it be ?

Mr. Lowder: Edith May Hallowell Carew.

His Honour: Mr. Litchfield, the name of the Accused if incorrectly stated in the summons: it appears Hallowell should be inserted after May. I propose to amend the summons in that manner. Now I will hear you. p.45

裁判官：ちょっと待ってください、リッチフィールドさん。ラウダーさん、あなたは……

ラウダー氏：友人ウォルフォード氏とともに弁護のために出廷しています。

裁判官：召喚状をご覧になりましたか、ラウダーさん。

ラウダー氏：見ました。

裁判官：そこに依頼人の氏名は正確に記載されていますか。

ラウダー氏：いいえ、違います。

裁判官：どうすべきですか。

ラウダー氏：イーデス・メイ・ハロウエル・カリューです。

裁判官：リッチフィールドさん、被告人の氏名が召喚状に誤って記載されています。メイのあとにハロウエルを挿入すべきです。そのように召喚状を修正するよう建議します。それでは審問に入ります。

イーデスの名前が違っているという個所に注目されたい。既述のとおりイーデスは結婚して姓はハロウエル・カリュー（酣鹵活爾喀律）となった。召喚状にはそのハロウエルが脱落しているという申し立てなのだ。英文では名前間違いの事実だけが記述されている。姓はハロウエル・カリューでなければならないという理由が書かれていない。説明がないのだから張坤徳にはイーデスの姓について知るすべがなかった。そのまま漢訳するしかない。ハロウエルが姓の一部であるなど想像もしなかった。なによりも英文にカリュー夫人 Mrs. Carew と普通に出てくるのだからなおさらだろう（後述）。

法廷における当事者たちの受け答えを見れば、これはもう速記録とでもいうべきものだ。張坤徳の漢訳はその英文をかなり圧縮していることが理解できる。

審問を翌日まで延期することについても手続き上必要な煩雑で長いやり取りがある。証人出廷の召喚状申請、保釈の申請、保釈金拠出者の確認などをいちいち決めなければならない。そういう段取りになっている。ここも張坤徳は

同様に端折って次のようにした。

【張坤徳】力芝飛爾特請緩一日審訊。另請發伝見証牌票。老胡特請保被告出外。公堂為稍停。老胡特即至一房將保單写就存案。有黒漆生及老氷生担保。副按察准行。旋退堂。1065-1066頁

リッチフィールドは審問を1日延期することを申請した。別に証人の公文書発行を申請したからラウダーは保証人と被告に出てもらい法廷はしばらく休廷となった。ラウダーはただちに部屋へ行き保証書を書いて登録しハッチスンとロビスンが保証すると判事補はそれを許可してただちに退廷した。

ラウダーが書いた保証書について説明がない。審問を翌日朝まで延期するにあたってその期間のカリユー夫人を保釈してほしいという申請書に関連する文書を指す。保釈には保証金が必要でその拠出するのがハッチスンとロビスンだ。保証書が適切な書式で書かれているかどうかは裁判所書記官が確認するという順序を踏む。

それぞれに申請と許可が必要とされる。裁判記録だからそれらの記述は詳細だ。やり取りの結果翌日朝10時の開廷が決められて判事補は退廷した。張坤徳はその朝10時開廷の合意など一部を省略しながら上のように手際よくまとめている。

以下は審問の大要だけを紹介する。

2日目、審問が開始される。リッチフィールドは王立海軍外科医トッド(Howard James McChleary Todd/拖忒)の証言を求めた。カリユーの容態と死因についての確認だ。続く証人は横浜で23年間開業している医師エドウィン・ホイラー(Edwin Wheeler/灰勒)である。カリユー家の家族医をしているからその証言は詳しい。カリユーは肝臓に持病をかかえていたのが体調不良の原因であるという見立てだ。

ところがカリユーの容態は急激に悪化し死去した。カリユー夫人から夫が腎臓の治療にヒ素を用いていたことを聞かされたのはその死後である。リッチフィールドの問いにホイラーは時間と場所、カリユーの様子を詳細に陳述した。カリユーの病気について肝臓、腎臓とあいまいにしているのにはわけがある(後述)。

3日目、メアリー・エスター・ジェイコブ(Mary Esther Jacob/就可白)が証言をした。カリユー家の家庭教師だ。カリユー夫人に命じられて丸屋(Maruya/丸善薬舗)に薬を買って行ったことがある。さらに紙屑箱から破り捨てたカリユー夫人あての手紙を回収したと証言した。

ジェイコブの親友スイス人エルサ(フロイライン)・クリストフェル(Elsa (Fraulein) Christoffel/潤列斯託弗爾)が証人として登場する。ジェイコブが見つけたという手紙の破片を復元した。手紙の内容はカリユー夫人の不倫を示唆する。5日目の審問でその手紙を書いた銀行員ハリー・ディキンソン(Harry Vansittart Dickinson/笛懇生)が証言台に立つ。彼の手紙は法廷で読み上げられた。手紙によりカリユーが夫人に暴力を振るっていたことが明らかになった。しかしディキンソンが書いたイーデス宛の手紙に見える親しい文面が当然のように夫人に対する印象を悪化させた。

説明する。カリユーは性病による痛み止めとしてヒ素を常用していた。肝臓だ腎臓だと病因を不明確にした理由だ。ならばカリユー本人が誤ってヒ素を多く摂取した可能性もある。ところが家庭教師の証言により夫人が複数の手紙を破棄していたという怪しい行動が明らかになった。夫の死に関係したのではないかという疑惑が生じた。

審問6日目までカリユー夫人の弟、中国人の使用人、日本人を含めた複数の証人が証言した。明らかになった事実のひとつはカリユー夫妻の不仲なことだった。徳岡孝夫はつぎのように書

いている。「カリューは家庭の外に情婦をつくって金を注ぎ込み、家庭の中では暴力を振るい、夫婦の仲は破局寸前まで行っていた(とカリュー夫人は訴えている)。その一方でカリュー夫人は相談相手に独身男性を選び、カリューは妻とディキンソンのただならぬ仲に薄々勘づいていた。カリュー家は、まるで地獄のような状態だったのである」(159頁)わかりやすく納得のいく説明だと思う。

予備審問の最後に訴追人リッチフィールドが発言した。張坤徳漢訳とそれに該当する英文を引用する。漢訳は抄訳しているとくり返す。

【張坤徳】力芝飛爾特乃申説大旨。謂原告各見証所供。已足証略妻謀害之実據。問官准力芝飛爾特。以謀害丈夫罪名。控告略律之妻。另派陪審官(割注：西例事大則有陪審官)審辦。1143頁

リッチフィールドが要旨を説明して言うには、それぞれの証人が証言したことはカリューの妻が殺害を計画していた事実を証拠立てるに足るものだ。原告リッチフィールドが夫殺害の罪名でカリューの妻を訴追し、別に陪審員(割注：西洋では事件が大きいと陪審員がいる)を派遣して審理することを裁判官はお許しいただきたい。

【英文】 Upon the evidence I have laid before you, sir, I have to ask for the committal of the accused for trial before a jury. The evidence is essentially, as in most cases of this kind, circumstantial. I submit there is a prima facie case to justify committal for trial before a jury. The medical testimony points to the fact of death by arsenic or some other poison. The evidence I have laid before you shows that arsenic in considerable quantities was introduced into the house shortly before his death. Part of that arsenic was traced

directly to the hands of Mrs. Carew. It was shown that Mrs. Carew had the chief duty of nursing. It was also shown, I submit, in spite of all appearances to the contrary, that the accused led one person to believe that there were serious and almost irreconcilable differences between them. These are the broad facts before you. I ask for committal. pp.74-75

閣下、私が提出した証拠に基づき陪審員による裁判のため被告人の収監を要請します。証拠は基本的にこの種の事件の多くと同様に状況証拠です。私は陪審員裁判に付すことを正当化する一応の証拠があることを申し上げます。医学的証言はヒ素やその他の毒物による死亡の事実を示しています。私が提出した証拠によれば、彼が死亡する直前にかかなりの量のヒ素が家に持ち込まれました。そのヒ素の一部は直接カリュー夫人の手に渡りました。カリュー夫人が看護の主要責任者であったことが示されてもいます。また被告人がある人物に、あらゆる外見に反してふたりの間には深刻でほとんど和解できない相違があると信じ込ませたことも示されました。以上が明らかな事実です。私は収監を要請します。

リッチフィールドが質問して証人たちがそれに答える。裁判官がそれを取り仕切る。弁護人ラウダーが弁論を行なう。それらの発言を逐一記録したのが集成本だ。張坤徳はその手続き形式を省略して内容部分のみを抽出凝縮した。本作品での彼の漢訳方法である。抄訳という理由だ。

公判

予備審問が終わって陪審員の参加する公判になる。漢訳は『時務報』第18-23冊の全6回連載で長い。新しい人物が登場するし証人も多く

それらを細かく記録したから縮約したとはいえ長くなるのも当然だ。ただし内容はといえば前段階の予備審問を基本的にくり返したものになる。

公判初日(1897.1.5)の新聞記事はつぎのように書き始められた。

【英文】 Those wending their way past the Post Office and of Main Street on Tuesday morning, Jan. 5th, at five minutes to ten , might have noticed a closed 'rikisha, proceeding at a walking pace and followed by two men. The 'rikisha was occupied by a lady in deep mourning, and that lady is accused of a crime of which the penalty, should she be found guilty, is deth. p.76

1月5日火曜日の朝10時5分前、大通り突き当りの郵便局を通り過ぎようとした人々は、歩くような速度で進む覆いをした人力車にふたりの男性が付きしたがっているのに気づいたかもしれない。その人力車には喪服を着た婦人が乗っており、有罪が決まれば死刑となる罪に問われている。

裁判記録とはいえ新聞記事だからここは記者の筆になる説明だ。10時前に法廷が傍聴人で満員になっているという現場報告もある。だが張坤徳は不要だと判断したらしくそれらを削除した。

本稿では冒頭と結末部分だけを紹介するにとどめる。

裁判所書記官モスによる起訴状朗読から始まる。ただし張坤徳はモスの名前を出さない。

【張坤徳】力芝飛爾特因發誓控告(割注:至此方能指定喀律妻為罪人故重行發誓控告)曰。我大狀師海唔類崔爾斯(名)力芝飛爾特(姓)今奉英國國家之命。在日本仁[神]奈川(割注:即横浜)英國公堂。因有實在

原故疑心安的士美酣鹵活爾(名)喀律(夫姓)。於一千八百九十六年十月二十二日。起意謀死華爾忒(名)喀律(姓)與英君主所定平安國律違背。故行發誓控告。1212頁

リッチフィールドが宣誓のうえ訴追して(割注:ここでカリューの妻を罪人に指定することができるから改めて宣誓のうえ訴追するのである)いうには、わたくし訴追人ヘンリー・チャールズ(名)リッチフィールド(姓)はイギリス國家の命令を奉じ在日本神奈川(割注:横浜)イギリス領事館裁判所において、疑心を持ったイーデス・メイ・ハロウエル(名)カリュー(夫の姓)が1896年10月22日にウォルター(名)カリュー(姓)を故意に殺害し、イギリス君主の定めた平安と法則に違反したことにより宣誓のうえ訴追します。

【英文】 Henry Charles Litchfield The Crown Prosecutor in Japan for our Lady Queen presents and charges that at Yokohama Japan Edith May Hallowell Carew on the twenty-second day of October in the year of our Lord 1896 feloniously wilfully and of her malice aforethought did kill and murder one Walter Raymond Hallowell Carew against the peace of Our Lady the Queen her Crown and Dignity. p.77

女王陛下のための日本における王室検事ヘンリー・チャールズ・リッチフィールドは、主の1896年10月22日、横浜においてイーデス・メイ・ハロウエル・カリューが故意に悪意を持ってウォルター・レイモンド・ハロウエル・カリュー1名を殺害し、女王陛下の平和と威厳に反したことを提示し告発する。

張坤徳はイーデス(安的士)・メイ(美)・ハロウエル(酣鹵活爾)までを名と考えたから

「安的士美酣鹵活爾(名)喀律(夫姓)」と漢訳表示した。区切りが間違っている。ハロウェル・カリュー(鹵活爾喀律)という姓であることはすでに述べた。それを知らなかった張坤徳が注釈を誤るのはしかたがない。勘違いしているから夫人に合わせて夫の姓もカリューだけを示した。それ以外は英文のほぼそのままである。

細かい個所に注目する。選出された5人の陪審員のひとりにワトソン(Arthur Henry Cole Watson)がいる。張坤徳は音訳して「滑震」の漢字を当てた。これは『時務報』に掲載した漢訳ホームズものに登場するおなじみのWatsonの漢訳と同一だ。漢訳者が同じだから当然であるといえそうに違いない。ちなみに別の漢訳「華生」があって、こちらの方が後に多く使用された。

公判でもカリューの病状とヒ素および薬物の入手経路、その数量などについて関係者からの緻密な証言が続く。カリュー死後の検屍結果、破られた手紙などの説明も同様だ。不可解な部分を残しながらもカリュー夫人有罪の方向に傾いていく。予備審問の時よりも詳しい個所もあるが事件全体の大きな流れに変化はない。

違うのは公判中に家庭教師ジェイコブがカリュー殺害容疑で逮捕され予備審問に付されたことだ。カリューひとりに関わってふたつの裁判が並行して行なわれた。張坤徳は英文にもとづきまとめているだけで説明はしない。異常な状況が展開しているのを目にして読者は戸惑っただろう。

公判14日目(1897.1.23) 弁護人ラウダーが陪審員に向けた弁論から一部を引用する。法の正義を求める認識を展開している。

【張坤徳】我所言之公道。指英美両国公堂所有之公道説。而天下各国亦無之。此公道。總言之。其理有三。一被人控告。未証出有罪之前。応以無罪視之。二此種証拠。必要的確。使問官心中不疑。三原告果能証出的

據。在原告之理長。不在被告之口弱。1487頁

私のいう正義とはイギリス、アメリカ両国の法廷でいう正義です。しかも世界各国にそれはありません。この正義は総じて言えば三つの原則があります。1は訴追された者は証拠が出されて有罪になるまでは無罪だとみなされなければなりません。2はその証拠は確実性が必要であり裁判官の心中に疑問を起こさせてはなりません。3は原告が提出できる証拠は原告の論理がすぐれているところにあり被告の主張に弱点があるのではないのです。

【英文】——Justice that is as it is administered in the Criminal Courts of Great Britain and the United States, but in no other courts in all the world. It may be summed up in three famous rules which are as follow. The first is this: that the law presumes the innocence of a person charged with crime until the contrary is proved. The second is that the proof must be affirmative and of so cogent a nature as to leave in the minds of the Jury no reasonable doubt of the guilt of the prisoner. The third is that the burden of this proof is on the prosecution, which if it is to succeed must succeed on the strength of its own case and not by the weakness of the defence. p.224

——正義とはイギリスやアメリカの刑事法院で行なわれているものです、世界中の他の法院では行なわれてはいません。それは次の三つの有名なルールに要約されます。第1は、犯罪の嫌疑をかけられた者はその嫌疑が立証されるまでは無罪だと推定されるというものです。第2は、その証明は肯定的でなければならず、陪審員の心に被告人の有罪について合理的な疑いを残さない

ような説得力のあるものでなければならぬということ。第3に、この立証責任は検察側にあり、もし検察側が成功しようとするならば弁護側の弱点ではなく自らの立証の強さによって成功しなければならないということ。

簡単にいえば、1 推定無罪、2 合理的証拠、3 立証責任は検察側にある、という3原則だ。

張坤徳が漢訳した「問官(裁判官)」は間違い。「陪審官(陪審員)」でなくてはならない。小さな個所だが司法制度についての認識に関わる。そこを除けば張坤徳の理解は基本的に正しい。

イギリス、アメリカ法廷の3原則であるところり返す。この基本原則こそが張坤徳が漢訳したかった部分のひとつだと容易に推量できる。

連載最終回の『時務報』第23冊に掲載された漢訳は注釈からはじまる。

【張坤徳】割注：以下老胡特復申辯略妻与笛肯生来往各信及略妻私取呈繳公堂之信各情太長不訳。1556頁

割注：ラウダーが弁明したカリューの妻とディキンソンの手紙のやりとりおよびカリューの妻が法廷に提出した手紙を竊取したことについて、それぞれの内容があまりにも長いので翻訳しない。

張坤徳は記事を部分的に省略することにより漢訳全体を終結させる方向に筆を進めた。

続いて裁判官が法廷で提出された内容を整理し検討する事項と無視すべき事柄に分けて陪審員に告げた。そうして裁定となる。最後部分だ。

【張坤徳】於是陪審官十二人。至密室商酌。出即対問官断称有罪。問官即伝略妻示曰。已定汝絞罪矣。其後駐日公使。又減定為監禁終身。並作苦工云。 此稿已完 1559

頁

そこで陪審員12名は密室で協議をして出てくると裁判官に有罪の裁定を告げた。裁判官はカリューの妻に絞首刑が定められたと言った。その後、駐日公使が終身監禁と重労働に減刑した。 本稿完了

陪審員の人数が違う。公判の最初に陪審員5名を選出したと漢訳しているのだが張坤徳はそれを忘れたらしい。すなわち「滑震、夕洪生、抹克来倫、派忒生、待味生五人為陪審官」(1213頁)だ。念のため集成本にもとづき各人の名前を英文で示す。Arthur Henry Cole Watson、Robert Courtney Kenrick Johnson、Duncan MacLaren、Andrew Patterson、Joseph Davieson である。

関連して既出の人名もあげる。Hutchison 黒漆生、Robison 老冰生、Dickinson 笛懇生だ。これら人名の「-son」には「生」を当てていることが共通する。ならばワトソン Watson は「滑震」ではなく「滑生」にすれば統一が取れたように思う。張坤徳がそうしなかった理由は知らない。

上の漢訳は以下が該当する。

【英文】The Jury retired to consider their verdict at 2.35. After an absence of barely thirty minutes, to be precise at three minutes past three o'clock, the jury returned.

The Clerk of the Court: Gentlemen of the Jury, have you agreed upon your verdict?

Mr. Patterson: We have.

How say you, do you find Edith May Hallowell Carew guilty or not guilty?—Guilty.

Is that the verdict of you all?—It is. p.341

陪審員は2時35分に評決を検討するため

に退席した。陪審員は30分ほど席を外し、正確には3時3分過ぎにもどってきた。

裁判所書記官：陪審員の皆さん、評決に合意されましたか？

パターソン氏：合意しました

エディス・メイ・ハロウェル・カリュウを有罪としますか無罪としますか？——有罪です。

それが皆さんの評決ですか？——そうです。

張坤徳は英文にもとづいているが裁判所書記官を省略するなどいくらか書き換えた。

カリュウ夫人が減刑になったのは事実だ。しかし張坤徳はそうなった理由の書かれた部分を省略した。説明不足であることを認めない。

集成本の最後には「減刑宣告 (THE SENTENCE COMMUTED.)」(年月日不記)が収録されている。イギリス公使(アーネスト・サトウ Ernest Mason Satow)から寄せられた文書だ。張坤徳が使用した個所はつぎである。

【英文】…… in view of the Imperial Proclamation of H. M. the Emperor dated the 31st Jan., granting to all Japanese subjects under sentence on that day a remission of punishment, it appears proper that a similar measure of grace should be extended to the criminal in this case, whose trial in a Court, sitting in H. M.'s dominions, had been proceeding for some days before and was about to be brought to a conclusion at the time of H. M.'s Proclamation. H. B. M. Minister has accordingly decided not to direct that the sentence of death be carried into execution, and in virtue of the powers conferred upon him by the order in Council, 1865, and otherwise, has directed that in lieu of

suffering capital punishment Mrs. Carew shall be imprisoned, with hard labour, for life. p.342

…… 1月31日付の天皇陛下の勅令により、その日に刑に服していたすべての日本国民に刑罰の免除が与えられたことに鑑みれば、天皇陛下の勅令が發布された時点で天皇領内の裁判所において数日前から審理が進められ結審しようとしていた本件の犯人にも同様の寛大な措置が適用されるべきであると思われる。従って英国女王陛下の公使は死刑の執行を命じないことを決定し、1865年の(注：中国および日本における裁判権の行使に関する)評議会命令で与えられた権限により死刑に処せられる代わりにカリュウ夫人を終身重労働刑とすることに決定した。

孝明天皇妃の大喪による大赦令がイギリス人のカリュウ夫人(当時29歳)にも適用された。死刑を免れたのである。

張坤徳はイギリス公使の文書であることは明かさずに減刑の事実のみを取り出して漢訳を終了した。

後にカリュウ夫人は両親の尽力により香港殖民地刑務所を経てイギリスへ移送された。終身重労働刑だったがさらに恩赦により服役期間が短縮され42歳で出獄すると90歳まで生きたという(徳岡357、413頁)。

結 論

張坤徳はカリュウ毒殺事件裁判の予備審問と公判の部分を漢訳した。ただし圧縮簡略化しながら彼なりにまとめたものだ。自分の考えを述べることはない。彼の主眼は裁判所における原告と被告、弁護人、証人のやり取りをそのまま紹介することだった。同時代に日本横浜で行なわれた裁判の報道を英字新聞を介して清末の読者に伝えたといい直してもいい。裁判によって

証拠の有効性を確認していく。それにもとづき判断されるという手続きそのものを重視した。法廷の3原則を含んだイギリスの裁判制度の実際を取り出して具体的に提示したのである。

『時務報』掲載の刑事物語は犯人摘発の過程を示し、漢訳ホームズは推理と証拠の重要性を述べる。あくまでも実際にあった犯罪の報道という括りで開示した。探偵小説としての扱いはない。捜査による犯人確保を大きく警察活動とすれば、その後に行なわれる裁判と連動して一揃えになっている。つまり警察と裁判の全体が情報伝達の対象であった。報道記事の漢訳それ自体が啓蒙教育の一環だったのはいうまでもない。 罍

【注】

- 1) 周刊版『THE NORTH CHINA HERALD』1897年1月15日付はカリュー毒殺事件「THE CAREW POISONING CASE」公判1日目の裁判報道を掲載する。『ジャパン・ガゼット』からの転載だ。同じく1897年1月29日付には公判7-12日目、途中欠落があり、1897年2月12日付に17-21(最終)日の裁判記事が掲載される(open library 所収)。しかし『時務報』掲載の漢訳にある予備審問とイギリス公使(アーネスト・サトウ)「減刑宣告」が見えない。『THE NORTH CHINA HERALD』は張坤徳漢訳の材源ではないと結論する。またカリュー事件関係の上海における英文報道は日本の『ジャパン・ガゼット』が出処だと断定していい。

【参考文献】本文で紹介した以外の文献

MOLLY WHITTINGTON-EGAN “MURDER ON THE BLUFF: CAREW POISONING CASE” SCOTLAND: NEIL WILSON PUBLISHING, 1996 電字版

徳岡孝夫『横浜・山手の出来事』双葉文庫2005.6.20
カセイジン「特集 カリュー氏毒殺事件——山手外国人居留地版2時間ミステリー」『横浜歴史さろん』2020.5.7 電字版

蘆花『外交奇譚』の漢訳(中)

沢本香子

11 「12 大使夫人」のばあい

原作題名は「大使夫人 [MADAME THE AMBASSADRESS] 」という。蘆花日訳はそのままを採用した。漢訳は不記「紅花球」。赤い花球とは結婚式など祝いに飾る赤い造花を指す。めでたい「赤い飾り花」はそのまま大使夫人につながるというわけ。もうひとつ言えば大使と夫人が取り決めた暗号に「red bouquet / 赤の花束 / 紅花一束」がある。それにもかけている。すぐれた漢訳題名である。

蘆花の前言を見る。

【原作】なし

【蘆花】此一篇は無頼者クリスピーが以太利の首相たりし時の物語なり。此物語を読むにつきて、豫め記憶す可きは / (一) 以太利と仏蘭西の間は常に犬猿の関係なる事。 / (二) 同じ以太利に於ても、羅馬法王と王家の間は、氷炭も沓ならざる事。 / (三) 仏蘭西にはナポレオン党の外、正統王党ありて、常に共和の隙を覗ひ、其首領は即ちアンリー五世と自称するシヤムポオル伯なる事。 / 故に以太利朝廷は仏国の王党と結びて仏国共和の不利を計らんとすれば、仏国はまた羅馬法王を嗾かして以太利朝廷の不利を計る。是れ本篇の趣構なり。

309頁

【外交報】義法両国交怨、時羅馬教皇与義廷積不相容、而法蘭西又有王党、嘗伺共和党之隙、故義廷則陰結王党、欲傾其共和政府、法人則嗾使教皇、謀不利於義国、誦之、可見二国之情実矣。93期13丁オ

イタリア、フランス両国は怨みをもって交わり、ローマ教皇とイタリア朝廷は長く敵対している。しかもフランスには王党があり共和党の隙をうかがっていたからイタリア朝廷は陰で(フランスの)王党と結びその共和政府を圧倒しようとし、フランス人は教皇をそそのかしてイタリアの不利を計る。読めば2国の実状を理解することができる。

イタリア(以[伊]太利で不統一。別に意太利もある)とフランスが反目する状況を説明している。フランスが背後からローマ教皇を焚きつけてイタリア王家と不仲になっている。フランスの王党派と共和派が対立し、イタリア朝廷とフランスの王党が結託する。2国のそれぞれが複雑な事情で敵対し結びつく。大使がその渦中に飛びこんでいく。

不記は蘆花の箇条書きを採用せず一部を省略しながら大要を簡潔に漢訳した。

「アンリー五世と自称するシヤムボオル伯」は蘆花「百合の花」に、「羅馬法王」は同じく「法王殿の墓」に出てきた。

本篇はアップワード連作を締めくくる作品だ。フランスとイタリアがどれほど壮大な外交合戦を展開するのか読者は期待するだろう。しかし本篇の眼目は蘆花前言のいうとおりではない。陰謀を目くらましとしてばらまいて別の物語を用意しているのだった。そういう意味では意外作である。

それを言う前に蘆花日訳にはアップワード原作とは別物になっている部分があることを指摘する。

蘆花日訳の書き出しは和気藹々とした雰囲気提示している。大使が楽しそうに聞き手をもてなしているのだ。

【蘆花】明日は巴里を去らむとする日の夕、かねて懇情を受けたる大使の許を訪へば、いたく別を惜みて、夫人諸共心を盡したる饗応に、夜深くなるまで引とめられつ。今宵は名残りに最秘蔵の自慢話をなす可しとて、主人の大使は珈琲果つるより余を引立て、暖爐の火暖かなる書齋に連れ行きぬ。夫人は去りかたき用事ありとて、暫し坐をはづしぬれば、主客唯二人差向ひて、燻らす苺の煙りに互の顔もおぼろなり。／＼其自慢の御話とは促せば、／＼さながら記憶の糸を辿りて昔へ昔へと遡り行く様に、眉を垂れ眼を細ふして、徐ろに巻苺を撚りつゝありし主人は、忽ち潤と眼を開きて唇辺に微笑を湛へつ、仏蘭西人ならずば、寧ろ仏蘭西の外交家ならでは、発し得まじき愛嬌沢山の声音を以て、徐々に談緒を繰り出しぬ。310-311頁

【外交報】予去巴黎前一夕(割注:著者自謂)、訪故友某大使(割注:下称主人)、殷勤惜別、其婦出具享客、夜闌、猶挽留不舍、大使曰、今宵請贈君一紀念、吾有密語、足以自豪、君樂聞之乎、飲加非訖、主人導予入煖室、其婦離座他適、主客相向、菸氣薰然、面模糊不可辨、客促主人曰、所謂豪語者何、主人追憶往昔、手淡巴菝、低眉垂盼、有頃、張目微笑、徐徐啓齒、其詞之宛轉、其音之晴朗、誠有非法蘭西外交家、不能道其隻字者、93期8丁オウ

私(割注:著者の自称)がパリを去る前のある夜、古い友の某大使(割注:以下主人と称する)を訪問した。丁寧に別れを惜しむとその夫人とともにもてなしてくれた。夜がふけたがなおも引き留めて大使は「今宵は君に記念の贈り物をしよう。私には自

慢するに足る秘密の話がある。君も聞くのが楽しみだろう」という。コーヒーを飲み終わると主人は私を暖かい部屋に導き入れた。夫人は席をはずすとよそへ行った。主客は差し向かいでタバコの煙に顔さえもぼんやりして見分けがつかない。客は主人にいった。「自慢話とは何でしょうか」主人は昔を追憶し、タバコを手にして眉を低め下を見ていたがしばらくすると目をあけて微笑むと徐々に話しはじめた。その言葉は低く高くさえずり、その音は清々しく、まことにフランス外交家でなければ1語すらも発することのできないものだった。

聞き手の青年がパリを離れるというので大使夫妻は彼を暖かくもてなした。大使の方から最後の自慢話を語ろうと申し出ている。いかにもありそうな幕開けである。大使の態度はまことにゆったりとしていてフランス人としての特徴をそなえていることを強調した説明だ。不記漢訳は蘆花日記をほぼ直訳している。

ところがアップワード原作は蘆花の書いたのとはまったく違うのである。冒頭からして異なる。

【原作】 WHAT is this that I find, faithless one! So, while I have been imparting to you my most sacred confidences, you have allowed yourself to reproduce them in a magazine which is read by all the world! p.353

私が見つけたこれは何だ、不誠実な人だな！ 私が最も神聖な秘密を君に打ち明けている間に、君は世界中が読んでいる雑誌にそれを転載することを許してしまっているのではないか！

聞き手の青年がパリを去るにあたり大使に挨拶をしに行った時のことであるのは同じだ。し

かし大使は不機嫌で聞き手に対して憤怒の態度を示した。大使の活躍譚を雑誌に発表しているのがけしからんという。青年が大使の名前を隠していると弁明しても納得しない。皆に知られてしまって大通りを歩くことができないと立腹している。大使の個性を明らかにしたことを歴史は正しかったと認めるだろう、と青年は説得した。それで大使はようやく怒りをしずめて青年に食事をするよう勧める。青年は大使にロマンチックな話をしてくれるよう求めて物語がはじまる。大使自らが上機嫌で秘密の話を語ろうと書いたのは蘆花の創作だ。原作はそれとは逆なのだった。

アップワード原作では最終話が大使の怒りによってふたりの関係がぎくしゃくしている。ある約束がその原因になっているらしい。

その根拠は聞き手の次の説明だ。「そして今回、私は彼が秘密保持契約を更新しようとしなかったことに気づいた [And this time I remarked that he made no attempt to renew the stipulation of secrecy]」 (p.355)

大使の物語を聞くにあたってふたりは「秘密保持契約 [the stipulation of secrecy]」を結んでいたという。大使にしてみればその契約があるにもかかわらず聞き手が勝手に雑誌に発表しているのが気に入らない。これに対して、大使の実名を出していないのだから問題はない、というのが聞き手の主張だ。そうして結果的にはうやむやになった。だから大使の物語が雑誌に掲載されている。

「世界中が読んでいる雑誌 [a magazine which is read by all the world]」とはアップワード原作に掲載している『ピアスンズ・マガジン』にほかならない。ここで読者はあらためて驚くことになる。大使の冒険譚は読者と地続きの場所で発生した現在に近いものだと理解するからだ。同時代に進行している物語だというアップワードの時間設定が絶妙である。

以上のように原作者が工夫をこらした個所だ。

しかし蘆花はその冒頭部分を上述のごとく別物に改変した。そこは蘆花の完全な作文なのである。蘆花は物語の最終回にふたりの対立場面を盛り込む考えはなかった。そうしてそこに翻案要素を強く注入した。

アップワード原作とほぼ重なる部分を次に示す。ただし直訳ではないから完全に一致するわけではない。

【原作】 “In the first place,” he began, “ it is necessary that you should understand that I am speaking of the time when I was in Rome as Ambassador to the Kingdom of Italy, which you will not confound with my former mission to the Vatican. It was now that I began to perceive that difference between the ‘black’and‘white’worlds of which our good M. Zola has spoken in his book. The change was not altogether an agreeable one. I had ceased to be the friend of the Pope, but owing to the strained character of our relations with Italy, I had not been admitted to the intimacy of Umberto. / “You will say that I had no right to expect this. That is true; nevertheless other sovereigns of rank not inferior to the King of Italy have deigned to extend to me a friendship which I believe I have not abused.” pp.355-356

「まず第一に」と彼は始めた。「私がイタリア王国大使としてローマにいたときのことを話していることを理解していただく必要があります。このことはヴァチカンでの私の以前の任務では理解できないでしょう。ゾラ氏が本の中で語った「黒」と「白」の世界の違いを私が認識し始めたのはこの時でした。この変化は必ずしも好ましいものではありませんでした。私は教皇の友人

ではなくなったのですが、イタリアとの関係が緊張していたために私はウンベルト (注：1世、1844-1900。イタリア王国の第2代国王) と親しくなることが許されなかった。 / 「そんなことを期待する資格はなかった、と君は言うでしょう。そのとおり。とはいえイタリア国王に勝るとも劣らない身分の他の君主たちは、私に友好の手を差し伸べてくれましたし、私はそれを裏切っていないと信じています」

【蘆花】 「然り、最早彼此れ六七年近くもなる可し、自分は仏国を代表して意太利羅馬の都に駐割したることあり。今貴下に御話致すは此頃の出来事なり。 / 「斯く言つては嗚呼がましき次第ながら、自分も外交の道に入りてより年数も多く経ちて、凡そ歐洲列国の朝廷には或は五年或は三年駐割出入せずと云ふ事なく、到る處帝王君公の親信を辱ふし、不肖ながらも其親信の恩に背かざらんことを務めたり。然るに意太利国王陛下ばかりは、如何にしても自分を疎外し玉ひて、更に心腹を許し玉ふことなし。勿論此は両国政治上の関係の親しからざるに因りてなり。311頁

アップワード原作の下線部分が蘆花日記によってほぼ掬い取られている。ただし順序を入れ替えているし削除の方が多い。ヴァチカンあるいは作家ゾラとウンベルト1世についても無視した。それにかわって蘆花が自由に加筆している。大使が外交畑で積んだ年数を明示した。アップワード原作どおりではないことが理解できる。ただし原作を知らなければいかにもありそうな記述であるのは事実だ。蘆花の作家としての力量を十分に示している。

不記漢訳を引用する。

【外交報】 曰。是殆六七年前。予為駐義使臣事。予厠身外交界。歷有年所。駐歐洲列

国。或五年。或三年。所至辱王公親信。予亦斤斤自守。不敢忝背厥惠。惟義大利国王。与予常疎遠。不以心腹相許。此固由邦交之不睦。可無論。93期8丁オ

(大使は) つぎのように言った。「これはほとんど6、7年前のことだ。私はイタリア駐在の外交使臣となっていた。私が外交界に身をおいて数年を経ており、欧洲列国に駐在して5年あるいは3年で王公の信頼をいただき、私も細かいことを守ってその恩に背かないようにしていた。ただイタリア国王だけが私とは常に疎遠で心腹を許すことがなかった。これはもとより国交が良くないことによるものであることは言うまでもない」

不記漢訳はいつもどおり蘆花日訳の大筋を押さえて簡略化している。

宮中で舞踏会が催され大使も参加した。不思議なことにいつもは冷たいイタリア国王ウンベルト1世「Umberto/ウムベルト/温勃徳」が親しく話しかけてくる。大使を引き留めて離宮での猪狩り「a boar-hunt/猪狩/狩猟」の話などをやる。加えてマルゲリータ皇后「Margherita/マアガリタ/馬加利」までもがそれまでの不愛想な態度を改めて懇切になっている。あやしい。国王皇后の態度が突然に変化した裏にはなにかがあると大使は考えた。イタリアはフランスに対して不利益なことを企んでいるのではないか。

イタリア宮廷では大使の知り合いは数少ない。そのなかにひとりの美女がいた。皇后の女官ド・ウルビーノ伯爵夫人「Madame la Contessa D'Urbino/ド、ウルピノ伯爵夫人/杜隈匹伯爵夫人」である(名前はルチア Lucia。p.365。蘆花は無視する。320頁)。夫に死なれた寡婦だ。大使は実状の詳細を探るために彼女との交際を求めて味方に取り込むことにした。ふたりの会話はフランス語だ(そうアップワー

ドは英語で説明している p.360。蘆花は無視する。315頁)。

伯爵夫人の美貌を描写して蘆花日訳の方が原作よりも優れている個所を示す。

【原作】 The Countess smiled gracefully. Her teeth were indeed perfect. p.360

伯爵夫人は優雅に微笑んだ。彼女の歯は実に完璧でした。

【蘆花】伯爵夫人は微笑しつ。両行の真珠は、薔薇の唇を漏れて、皓として閃きたり。315-316頁

【外交報】時夫人微笑。齒如編貝。當笑靨乍露時。晶光皎然。93期9丁オ

その時、夫人は微笑んだ。貝を並べたような歯がえくぼによって現われたときらきら光った。

アップワード原作は伯爵夫人の歯が完璧だといっているにすぎない。それを蘆花は飾って「両行の真珠は、薔薇の唇を漏れて、皓として閃きたり」と加筆した。これは原文にもとづいてそれよりも具体的で美しい。直訳を超えた翻案だ。さらに不記はそれを受けて劣らない漢訳にしたのも素晴らしい。

褒めたあとで指摘するのは具合が悪いがこれはどうか、と感じる蘆花日訳もある。

大使がイタリアの情報を求めると伯爵夫人は危惧した。イタリアに不利益なことをしろをいうのか、と懸念を示したのも当然だ。それに対する大使の返答はつぎのとおり。

【原作】 Do I not at the same time ask if you have a regard for me which is stronger than political considerations? p.365

同時に、あなたが政治的な配慮よりも強い好意を私に対して抱いてくださっているのかどうか、お伺いしたいのですが。

「political considerations [政治的な配慮]」とはイタリアの不利益になるかどうかということ。それをうわまわる好意を自分に抱いてはいないのか、と大使は伯爵夫人に迫ったのである。政治よりも上位に私情を置いた厚かましくも自信満々のフランス人大使を原作者は読者に提示したのだ。

それに対して蘆花は違う訳語を当てた。

【蘆花】エ、悪ひですか、其様願ツちや悪ひですか。其様な政治の事ばかり考へて御出なさるですか 320頁

伯爵夫人の台詞「貴君はまさか妾に意大利の不利益になる様な事をせよと仰有るのでは無いますまいね? [But are you not asking me, in effect, to aid you against my own country? しかし、あなたは私に、事実上、私の国に対してあなたを援助するよう求めているのではないですか?]」がある。上文はそれに対する大使の返答なのだ。イタリアの不利益になることを伯爵夫人にやらせるのは「悪ひですか、其様願ツちや悪ひですか」。蘆花の日記は大使に彼の本性をむき出しにさせている。傲然というのがふさわしい。アップワード原作の表現からは離れているが、原作者の真意を拾い上げた結果の翻訳なのだ。誤りではない。しかしあまりにも露骨で強引すぎる。もう少し包み込んだ日記にならなかったものかと思う。

【外交報】不利乎、僕所望於卿、豈有不利者、卿僅思及政治之關係乎、93期10丁オ

不利益ですか。私があなたに望むものに不利益があるはずもない。あなたは政治の關係だけを考えているのですか。

蘆花日記が予想外の展開を示しているため不記の漢訳は不明瞭なものになっている。前後の文脈から判断したものだろうが適切とはいいが

たい。

蘆花が細かな部分にまで加筆していることを示す。物語る途中の大使に飲み物をとらせているのだ。それのないアップワード原作から示す。

【原作】In the meanwhile, however, I had taken certain steps of a different kind with the same end in view. p.366

しかしその一方で、私は同じ目的を持って別の種類のある手段を講じていた。

伯爵夫人を情報源に利用するほかに、具体的には海軍とヴァチカンの関係者にも接触して動きを探っていることをいう。上文に飲み物は見えない。次は蘆花日記だ。

【蘆花】主人はやをらチョコレートの蓋取り上げて咽をしめし、／自分は伯爵夫人の間諜をもて足れりとせず、猶も大事をとりて、(後略) 321頁

【外交報】語至此、主人引杯酒潤咽、乃継語曰、雖有夫人作間諜、然予意猶不敢自足、(後略) 93期10丁ウ

ここまで語ると主人(注:大使)は酒杯を取り上げて咽をうるおし、続けて語った。「夫人を間諜にしたとはいえまだ満足はせず(後略)

蘆花はアップワード原作には出てこないチョコレート飲料を追加した。また夫人を間諜にしたと露骨に説明している。ここも蘆花の翻案である。不記はチョコレートではなく酒に置き換えた。その方が場面により適合するという考えだろう。どのみち微妙に異なる漢訳だ。

伯爵夫人は皇后の女官を務めている。彼女が提供した情報によって大使自身が動き、ふたつの事実をつかんだ。

ひとつ、アンリ5世「Henri v. the Comte de Chambord/アンリー五世シヤムボオ[一]ル伯

／亨利五世亨[享]保爾伯爵」は公主「Clotilde／クロチルド／克魯諦」とイタリア国王皇太子「Naples／子一ブル／尼布爾」の婚姻を企んだ。アンリ5世には子供はいないというからそこはアップワードの創作だ。イタリア皇太子はナポリ生まれのエマヌエーレ3世だろう。

ふたつ、イタリア首相クリスピはアフリカのトリポリへ出兵しようとしている。

大使は各関係者に手を回して結婚を阻止し、軍についてはトリポリとは別方向の紅海に進路変更させた。フランスの利益になる彼の活躍は成功裡に終了したのだ。

問題は伯爵夫人である。大使との交際がイタリア宮廷の評判になっていた。秘密は伯爵夫人から漏れたとわかった。皇后は伯爵夫人が敵国の使者と交際していると激しく叱責した。大使とはもう会うことができないと伯爵夫人は涙にくれて落胆している。それに対して大使は皇后が立腹するのは正しいと発言し、夫人にフランス人になるように勧めた。どのようにすればフランス人になれるでしょうか。フランス人の妻になるのです。というわけで大使の妻がその伯爵夫人なのであった。ここを言うためにアップワードはフランスとイタリアの外交交渉を具体的に人物名を出しながら詳細に展開したのである。

【原作】 I had saved France, as you see, but I had lost my heart. p.387

ご覧のとおり、私はフランスを救ったのですが自分の心を失いました。

【蘆花】 イヤモウ御覧の通り、自分もクリスピーには打勝つて仏蘭西を救ひ得たれど此女將軍には敗北してまんまと吾魂を乗取られて候なり。あははゝゝ 347-348頁

【外交報】 且語且笑曰。僕不才。以三寸舌戰勝克列司。解仏蘭西之危。而顧敗北於女將軍之手也。噲。時夜色已闌。主客乃歛笑而別。96期9丁ウ

笑いながらつぎのように言った。「不肖

私は口先三寸でクリスピーに打ち勝つてフランスの危機を救ったが、ただこの女將軍には敗北した。はは」時に夜はすでにふけており主客は愉快に分かれたのだった。

フランスを救って (saved) 自分の心を失った (lost) とアップワードは書いた。対句風にして簡潔に終了させている。蘆花はそれでは説明不足だと考えたらしい。首相クリスピに勝利し伯爵夫人という女將軍に敗北したと言い換えてうまく翻訳している。不記はそれに加筆して、主客が愉快に分かれたと物語を終了させた。

この幕切れは小説として上出来だと思える。ただしアップワード原作ではもう少し続く。大使は、結局のところ国民性の違いとは何なのだろうか、と疑問を提示する。その中心をなす部分を引用する。

【原作】 beneath all these wars and intrigues, these plots and scandals of which we have talked so much, the sound heart of the people beats the same in every land, and those things which we have in common are greater than those which separate us. p.388

これらすべての戦争や陰謀、私たちがこれまで散々話してきた陰謀やスキャンダルの下では、人々の健全な心ほどこの国でも同じように鼓動しており、私たちに共通するもののほうが私たちを隔てるものよりも大きいのです。

アップワードは本作が連作の最終話だから総括するような説明が必要だと考えたらしい。なにか取ってつけたような文言だ。筆者としてはなくてもよかつたと思う。だからこそ蘆花が直訳せずに途中で打ち切った処理の方が翻案として適切だった。

12 「7 土京の一夜」のばあい

原作題名は「後宮の秘密 [A SERAGLIO SECRET]」(雑誌初出は「スルタンの足 [THE SULTAN'S FOOT]」)という。漢訳は不記「波斯剪」。

蘆花の題名「土京の一夜」の「土京」はオスマン=トルコ帝国の首都コンスタンティノーブル「Constantinople/君士丹丁堡/君士坦丁堡」のちのイスタンブールを指す。

ある夜、大使は散歩に出かけた。コンスタンティノーブル名物の犬が靴の片方を争っている。犬を追い払って靴を見れば人間の足がはまっていた。その足を抜き出すと異形だ。片足の主人が後宮(ハレム)に関係しているところから原作題名となる。漢訳題名が「波斯剪 [ペルシアのハサミ]」となる理由は後述する。

蘆花の前言からはじめる。

【原作】なし

【蘆花】千八百七十六年五月、露国土耳其の間危機一髪に迫れる折柄、土耳其皇帝アブドルアジズ(原作: Abdul Aziz Khan、p.79)突然位を退き、程なく暴かに崩じ、其甥ムラツド五世嗣ぎ、病身の故を以て在位四ヶ月にしてムラツドの弟なるアブダル、ハミツド二世位を継がれぬ。是れ今帝なり。／此篇は即ち其裡の消息を説くもの。171頁

【外交報】一千八百七十六年五月。俄土將起衅[衅]。土皇安蒲道子忽退位。暴崩。以猶子牟拉德五世嗣。是編即述土皇暴崩之由者也。96期9丁ウ

1876年5月、ロシアとトルコに争いが起りそうな時、トルコのアブドルアジズは突然退位し、にわか崩じると甥のムラツド五世がついだ。本篇はトルコ皇帝が突然崩じた理由を述べるものである。

蘆花はトルコ皇帝の系統を名前を出して説明

している。

補足する。オスマン=トルコ帝国の第32代皇帝アブデュルアズィズは1876年クーデターにより廃位、幽閉後に死去した(結論は他殺)。同年(5.30-8.31)甥の第33代皇帝ムラド5世(Murad V。又 Murat V)が即位する。さらに弟のアブデュルハミト2世が第34代皇帝となった。そういう順序だ。また露土戦争(1877-78)でオスマン=トルコ帝国は敗北するが、これは本作品の結末部分にすこしだけ言及されている。

蘆花の説明では3名の皇帝を挙げて物語の焦点をわざとぼかした。だが不記ははっきりと皇帝アブデュルアズィズが崩じた事情だと書く。そこが異なる。不記は小説内容をよく把握している。

もうひとつ紹介する。蘆花に「ビーコンスフィールド卿 / Minister, Lord Beaconsfield」(173頁/p.70)が出てくる場面がある。不記はそれを「英相埜士礼立 [英国首相ディズレーリ]」(96期10丁オ)と漢訳した。誤訳のように見えるがそうではない。ビーコンズフィールドとはヴィクトリア女王の寵愛をうけたディズレーリその人のために創設された伯爵号である。不記は蘆花日訳のままになぜ漢訳しなかったのかその理由は不明だ。確かな知識を持っていることはわかる。もっとも蘆花「一億万法」に「故ビーコンスフィールド伯ヂスレーリ氏」(226頁)と記述していた。該作を不記が漢訳して「埃及妃」だ。情報源はここだろう。

大使は名家の相貌遺伝について話ははじめた。「the Hapsburg lip / 奥地利家の唇 / 奥大利王家所出者。下唇必凸出 [オーストリア王家のものは下唇が必ず突き出ている]」(p.67/171頁/96期10丁オ)「the Bourbon chin / ブルボン家の顎 / 布爾奔族之類 [ブルボン家のほお]」(p.67/172頁/96期10丁オ)

オーストリア・ハプスブルク家は下唇に、フランス・ブルボン家は顎に特別な形質が出る。

血族結婚をくり返して身体的特徴が生じたことを指す。

「顎」は日本語では顎(あご)だが漢語では頬(ほお)を含む。あごの漢語は「下頷」「頤」「頰」などだ。それを使ったほうがよかった。不記の「一条鞭」では「頬(ほお)」を使っている。区別する必要がある単語だ。不記は蘆花が使用した漢字に惑わされたのだろう。

この身体的特色がオスマン＝トルコ皇帝では足に出る。その事実は厳密に隠蔽されていた。これに政権交代劇を絡めて本作が成立する。

大使が夜中の町で遭遇した奇妙な片足についてももう一度示す。

【原作】The foot which I held in my hand was unlike any other foot which I had ever seen—unlike any human foot. p.76

私が手に握ったその足は私がこれまで見たどの足とも違っていた——人間の足とも違っていました。

【蘆花】其足一斯様な足は見たこともなひ、実に人間の足とは云はれない。177頁

【外交報】厥物怪醜、幾不類人足。97期11丁ウ

そのものは何とも醜く、ほとんど人間の足ようではなかった。

足について原作の説明は具体的ではない。異形というだけで詳細を示さない方が読者の想像力を刺激するという考えなのだろう。蘆花もほぼ直訳だ。不記はより簡潔に漢訳した。

5月29日の夜にあった出来事だ。その夜は軍艦にも平生は見えない灯火がついている。激しい雷雨がある。それに和するように大砲の音が100発まで続くという異様な夜だった。皇帝が廃されて宮中に幽閉された。その甥ムラドの即位を祝ったのだ。

【蘆花】前に云つた其夜——五月廿九日の

夜こそ、一天万乗土耳其皇帝アブドル、アツジズ陛下が、帝位を廃され、宮中に幽せられた其晩でした。178頁

【外交報】所云五月二十九日夜者、即土皇安蒲道子被廢之夕也。97期11丁ウ

5月29日の夜というのはトルコ皇帝アブドル、アツジズが廃位された晩だった。

「一天万乗」とは天下を治める天子、君主のこと。不記はそれを「土皇[トルコ皇帝]」に含めて漢訳した。蘆花は「アブドルアジズ」と以前には表記していた。統一がとれていない。

蘆花の日記は5月29日と皇帝の廃位が自然と結びついている。どこにも問題は見つからない。

しかし原作は大いに違う。5月29日という日付について大使と聞き手の間に認識の齟齬があることを紙幅をとって述べているのだ。

まず大使と聞き手の雑談がある。北方と南方の天候の違いと酒の関係についての話題だ。本筋とは無関係だ。聞き手は大使のいう5月29日が何のことかわからない。イギリス人らしくその日付ではイングランド王チャールズ2世のことしか思いつかないという。この部分は翻訳する必要がないと蘆花は考えて省略した。先の日付に皇帝アブデュルアズィズの廃位を直結させている。翻案という理由だ。

皇帝アブデュルアズィズに人望がなかったのは性的狼藉が原因だった。それが革命につながるないように画策していた人物はメヘメド・ラシュディ「Mehemed Rushdi Pasha, the Grand Vizier/宰相メヘメツド、ルシヂー/宰相魯錫奇侯爵」(p.79/179頁/79期11オウ)だ。ところが皇帝は宰相の後宮にいる美女に手を出した。これが皇帝廃位につながるという大筋をアップワードは設定した。題名の「後宮の秘密[A SERAGLIO SECRET]」はここから来ている。

宰相は自分の後宮(ハレム)に入れた美女の態度がよくない方向に変化したことに気づいた。

外部の人間と関係ができたらしい。人員を配置して不審者の捕縛をもくろんだ。そこに衣を被った男が入り込む。待ち伏せていた者どもが飛びかかる。男は驚いて逃げたが扉に左足をはさまれて動けない。一太刀抜き打ちに足のくるぶしから切って落とされた。

以下は宰相の証言である。「彼」というのは侵入者、「私」はここで説明している宰相を指す。

【原作】Hardly was he well within the door when the slaves whom I had posted, carried away by their zeal, rushed forward to take him. He turned to flee, and would have escaped entirely had not some one in the confusion pushed the door to in time to catch him by the left foot./His friends outside began frantically attacking the door to release him, and then it was that one of the slaves, fearing that the intruder would get clear away, gave a sudden blow with his sword, and cut clean through the ankle with one stroke. p.93

彼はドアの中にほとんど入っていなかったのですが、私が配置していた奴隷たちは熱意に駆られて彼を捕まえよう突進していきましました。彼は逃げようとした。混乱の中で誰かがドアを押し左足で彼を捕らえなければ完全に逃げていたでしょう。／外にいる彼の友人たちは彼を逃がそうと必死にドアを攻撃し始めると侵入者が逃げ出すのを恐れた奴隷のひとりが剣の一撃で足首を切り落としたのです。

【蘆花】入ると倅しく、伏せて置いた男共がドツとおめいて飛びかゝる。彼方は仰天して逃げかゝる。逃る逃さぬの混雑まざれ、誰が押したかピシヤリと戸の締る拍子に、今逃げかゝった男の左の足をしめ込むだと思ひなさい。／外の奴等は其足をとらふ離

さうと、真黒になつて戸を押す。此方はまた逃がしては大変と、男の一人がたツた一太刀抜打に見事はさむだ足の踝から切つて落した。192-193頁

【外交報】遂入。甬踰闕。伏者譁起。男子大駭。亟思奔逸。正縈擾間。有人遽閉門。但不知為誰。男子左足夾門内。不得出。待於門外者。思曳出之。羣來撼門。諸奴恐為所脱。有一奴。急拔大刀揮之。斷其踝。97期13丁ウ-14丁オ

入ってきて敷居を越えるや伏せていた者たちがどつと飛びかかる。男は大いに驚き急いで逃げようとする。混乱の中で誰かは知らないが戸をびしゃりと閉めた者がいた。男は左足を戸に挟まれて出ることができない。戸の外にいた者が引っぱりだそうと束になって戸を揺さぶる。逃げられるのではないかと奴隷たちは恐れる。奴隷のひとりがさっと太刀を抜き振りその踝を切り落とした。

原作の活劇場面を蘆花は直訳で躍動感を表現してみごとに翻訳している。不記の漢訳もほぼ日訳どおりになっているのがわかる。

こうして切られた片足を見た宰相は宮中の秘密を知ってしまった。

【原作】Years ago, I had heard of a dark tradition in the Palace that the foot of the Sultan was not like a natural foot, that there was some revolting blemish hereditary in the House of Osman, which had to be concealed from all eyes. p.94

数年前のことですが私は宮殿でスルタンの足は自然な足とは違う、オスマン家に受け継がれた忌まわしい欠点がありそれは誰の目からも隠さなければならぬ、という暗い言い伝えを聞いたことがあります。

【蘆花】余程前の事だが、僕も宮中で内々

の噂を聞いたことがあるです、土耳其皇帝の足は人間の足の様ぢやない、オスマン家には醜らしい不具の遺伝があつて、其を見せない様に隠してある、と云ふことを聞ひたです。193頁

【外交報】予昔於宮廷曾聞人伝説。土皇之足奇醜。與人異。此為奧司曼遺傳之形体。每隱匿。不使人見。97期14丁オ

昔、私は宮廷で言い伝えを聞いたことがある。トルコ皇帝の足は醜く人間のものとは異なる。これはオスマン遺傳の形体でありいつも隠蔽し人に見せてはならない、と。

オスマン＝トルコ帝国の宮中には秘密がある。作品冒頭に言及したオーストリア・ハプスブルク家は下唇に、フランス・ブルボン家は顎に特徴があるのと結びつく。

こうして皇帝と宰相のどちらが生きるかの問題になった。皇帝廃位を以前から画策していた太后の同意を得てそれが実現する。太后は皇帝に覚悟を迫った。つまり自死を強要したのだ。

【原作】 Still he hesitated, and finally muttered something about not having a weapon. Instantly the Sultana snatched a sharp pair of scissors from her waist, and thrust them into his unwilling hands. p.95

それでも彼はためらいついには武器を持っていないとつぶやきました。太后は即座に腰から鋭利なハサミを取り出し、いやがる彼の手に押しつけた。

【蘆花】でも陛下は踟躕して、到頭刃物がないなどとこぼされる。突然太后は腰の衣兜(かくし)から鋭い鋏を引出して、いやがる陛下の手にさしつける。195頁

【外交報】帝初尚躊躇不決。終乃哀泣曰。奈無兵刃何。太后突自衣袋中出利剪。擲帝懷。97期14丁オウ

陛下は最初躊躇して決めることができな

い。ついにはさめざめと泣いて「刃物が無いからどうしようもない」という。太后は即座にポケットから鋭いハサミを出して陛下の懷にほうった。

廃位になった皇帝は迫られてペルシア鋏を自分の腕に突き刺して果てた。上の場面には見えない「波斯剪」がそのまま使用されている個所から示す。漢訳題名「波斯剪」の来源である。

【原作】 He appears to have taken his life by mean of a pair of Persian scissors, with which he is believed to have cut open a vein in the left arm, and then bled to death. p.82

彼はペルシアのハサミを用いて命を絶ったと思われます。つまりハサミで左腕静脈を切り裂き、その後出血して死亡したと考えられます。

【蘆花】多分波斯剪で、左の御腕の動脈を裁断になつて、其れで御果になつたものと見へます。181頁

【外交報】廢帝之崩。殆以波斯剪斷其左手動脈耳。97期11丁ウ

廢帝が崩御されたのはペルシアのハサミで左手動脈を裁断されたからでしょう。

不記による本漢訳は書き換える部分はない。省略の方向で簡潔にしている。しかも誤訳はほぼないといつていい。ところが1個所だけ例外的に間違っている。

【原作】 He appeared much agitated, a thing which is most unusual in an Oriental. p.81

彼はとても動揺しているように見えた。これは東洋人としては最も珍しいことでした。

【蘆花】使者の容子を見ると何だか躁々(そわそわ)して居る。東方人には珍らし

いことです。181頁

【外交報】初見来使形色倉遽。猶以為此東方人常態。無足異。97期11丁ウ

さて使者を見ると様子が慌ただしい。これは東方人には普通のことだと考えられるから異とするには及ばない。

トルコ人は他人に動揺した様子を見せない。これが大使の常識だった。ところがやってきた使者はそうではない。そのことを説明した個所だ。不記は反対の意味に理解している。勘違いすることもある。

13 「6 鞭の痕」のばあい

原作題名は「皇后陛下の名誉 [THE HONOUR OF AN EMPRESS]」という。漢訳は不記「一条鞭」。

オーストリア皇后はお忍びでイギリスにおもむき狐狩りに参加していた。随行者のひとりにマグラッツ (Magratz) 男爵がいる。「this Baron, (中略), was a dangerous, insolent man/此男実に腹黒い傲慢無礼の奴で」(原作 p.45/蘆花152頁)。原作の「危険で不埒な男で」を蘆花は「腹黒い傲慢無礼の奴で」と訳した。それほど離れてはいない。

その男爵に無礼があつたらしく皇后は彼の顔を乗馬鞭で打った。「I observed on his face narrow streak of red, crossing from the right ear to the mouth/右の耳から口へかけて、紅の条(すじ)がありありとついで居る」(p.46/154頁)。原作どおりだ。数年後にも鞭の痕は残っていた。「As he spoke I positively saw the faded scar of the whip leap into sight upon his dark skin [彼が話しているとき、彼の黒い肌に色褪せた鞭の痕が浮かぶの私はっきりと見ました] /と云ふ時、其薄黒ひ面に数年前の鞭の痕ありありと浮み出づるを認めた」(p.60/164-165頁)。ここを取り出して蘆花は日本語題名を「鞭の痕」に定めた。

根に持った男爵は本性をあらわし皇后に対する陰謀を画策した。皇太子の情死を引き起こすよう仕向けたのがこの男爵だ。愛する皇太子を失った皇后の無念を大使が引き受けた。決闘を仕掛けそれを口実にして男爵を殺した。法律では制裁することができないからだ。すなわち大使が皇后陛下の名誉を守るためにかかわって仇討をしたというのが物語の大筋である。

事件の背景にある歴史を複数の一般文献によってまとめれば次のとおり。オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世(1830-1916)とその皇后エリーザベットの息子がルドルフ皇太子(1858-89)だ。皇太子がマリー・ヴェッツェラ男爵令嬢と心中した(暗殺など諸説あり)。事件が起こった場所の名前をとって「マイヤーリンク事件」とも言われる。息子に代わる王位継承権者には皇帝の甥フランツ・フェルディナント(1863-1914)が指名された。このフェルディナントが1914年にサラエボにおいて暗殺されたのが第1次世界大戦の引き金になったことは知られている。

本作品の基本は以上の史実にもとづく。それに虚構の男爵を配役し彼との決闘に勝利する大使という物語を創作した。物語の語り手である大使そのものがアップワードが作りだした人物だから小説だとわざわざことわるまでもない。

鞭の痕は漢語でいえば「鞭迹」となる。だから漢訳名は「一条鞭迹」でもよかった。不詳の訳者(不記)はなぜかしら「一条鞭[1本の鞭]」とややあいまいにした。『外交報』掲載の漢訳題名は3文字に統一している。それに合わせたらしい。

前述したとおり『外交報』では以前の作品と重複して漢訳しない。結果として蘆花全12篇の漢訳が揃った。時期的に見て『説部腋』の版元である新小説社が単行本『外交小説』にまとめる可能性もあったと思う。ただし実現はしなかった。雑誌発表を見れば「外交小説」は角書になるからそう表記している。

蘆花訳には原作に存在しない独自の前言が書かれていることは述べた。日本の読者が理解しやすいように作品の時代背景、人間関係について蘆花が解説したものだ。不記がそのどこを引用したのか知るために長い引用する。漢訳の方向性を知るためだ。あらかじめ説明すると蘆花訳にほどこした下線部分が不記漢訳にほぼ一致する。

【原作】なし

【蘆花】本年即位五十年式を行はるゝ奥地利皇帝フランツ、ジヨセフ陛下は、近代の賢君なり。皇后陛下は有名の美人にして、騎馬遊獵を嗜み、活潑なる方なりき。然るに九年前皇室の一惨事起り、其為め帝も后も悄然として頽老の境に入り玉ひぬ。其は皇太子殿下の変の為めなり。／皇太子ルドルフ親王夙に素業治まらざるの評判あり。帝后深く之を憂へて、伯耳義王レオポルド二世の第二公主を太子の為に娶られしも、好からぬ風聞は太子を繞りぬ。其後太子は去る明治廿二年中苟くも大国の儲貳にあるまじき横死を遂げられたり。或は云ふ、情死。或は云ふ、主ある婦人と干繋ありし為め、其夫は三鞭酒の瓶を以て太子の頭を打破りぬと。149頁

【外交報】奥大利皇約瑟。近代賢君。后美容姿。好馳獵。去十余年前。以太子惨死。帝后皆廢然頽喪。太子名魯道夫。素業不治。帝后深憂之。為娶比利時王次女。太子仍不自檢。以曖昧暴卒。或曰為情死。或曰太子暈一婦。為其夫以酒瓶擊腦死。97期14丁ウ-15丁オ

オーストリア皇帝ジヨセフは近代の賢君である。皇后は容姿美しく騎馬狩獵を好んだ。10余年前、皇太子の惨死により皇帝も皇后も失望し気落ちされた。皇太子はルドルフといい、日頃の行ないはよろしくなかった。皇帝皇后は深く憂えてベルギー王の

次女を娶らせたが皇太子はやはり自分で制御することができず不明朗なまま急に逝去された。あるいは情死、あるいは皇太子がある婦人を愛したためその夫に酒瓶で頭を殴られて死去したという。

蘆花は「本年即位五十年」と書いた。ヨーゼフ1世は1848年から1916年まで在位する。蘆花の日訳は1898年になされたから「本年即位五十年」は正確な記述である。またルドルフ皇太子の情死は1889年すなわち「明治廿二年」に当たる。蘆花は史実を正しく把握して翻訳している。

皇太子について「夙に素業治まらざる／素業不治」という。女性関係が乱れていたという意味だ。それが情死につながる要因のひとつとなる。

不記は蘆花の訳文から固有名詞の一部、あるいは「本年即位五十年」「明治廿二年」などを省略した。部分的に選択して摘み取り文言で漢訳する方針であることがわかる。

本文冒頭を比較対照する。ここも原作にほどこした下線部分が蘆花訳にほぼ一致する。

【原作】“THIS is a trivial affair.” commented the Ambassador, as he laid down the newspaper in which he had been reading an account of one of M. de Rochefort's numerous duels. “I do not wonder that you English amuse yourselves with these comedies, which reflect little honour on France. Nevertheless, let me tell you that, when we please, we can make of duel something very different: that is to say an affair of life and death.” (中略) / “It is the too great facility with which these affairs are arranged that has involved them in ridicule.” he said, pursuing his own line of thought. “It is

when a crime has been committed which is truly worthy of death, and yet which, from its nature, is beyond the reach of laws, that the duel becomes a sacred resource, indispensable in the interests of mankind.”
pp.42-43

「これはつまらないことだ」と述べて大使は読んでいた新聞を置いた。それにはロシュフォール氏にまつわる多数の決闘のひとつについて記事が書かれていた。「あなたファイギリス人がフランスの名誉を損なうような喜劇で自らを楽しませるのは不思議ではないね。とはいえ私たちが望めば決闘というものをまったく別のものにすることができると申しておこう。つまり生と死の問題なのだよ」(中略)／「決闘が嘲笑的になっているのは、このような事柄があまりにも簡単に手配されているからだね」と彼独自の考えを話した。「本当に死に値する犯罪が行なわれたとき、しかもその性質上、法律の及ばないものであるとき決闘は神聖な方策となり人類の利益のために不可欠なものなのだよ」

ヴィクトル・アンリ・ロシュフォール(1831-1913)はフランスの作家、ジャーナリスト。一連の決闘でも知られるという。ここでは「決闘」を話題にしてフランス人大使がイギリス人の聞き手に皮肉を言う個所だ。重要なのは法律で処罰できないばあい決闘によって問題を解決できるという説明である。そのとおりの出来事をこれから話すという前触れにしている。

下線箇所を選択して蘆花は翻訳した。皮肉については省略。「決闘が嘲笑的になっている」部分を蘆花は前に送り込んで入れ替えてもいる。これが蘆花による翻案だ。それでも作品冒頭はほぼ原作どおりに要約したといつていい。蘆花日訳と不記漢訳は次のとおり。

【蘆花】『つまらぬ』云いつゝ大使は新聞をさし置きたり。新聞には恰もロセフオル氏が例の得意の血闘一条を記載しありたるを、大使は読みて居たりしなり。『血闘も近頃は余り容易なつたものだから、兎角物笑になるのだな。併し血闘も血闘次第で、ずいぶん生死分け目の大事となることがある。例へば、其罪悪実に万死に当るものだが、併し何分にも法律の制裁の届き兼ねると云ふ様な場合には、其れこそ血闘は実に人間の利益に欠く可からざるものだテ』。

150頁

【外交報】有羅錫福者著併命論(割注:原文謂之血闘)。載之新聞紙。某大使読未竟。棄去。自語曰。殊無趣。今人視併命太易。故為世所笑。其實併命為生死攸關之事。必行之得当地。而後可。如罪当万死。而為法律所不能及者。以併命處決之。寧非人世所不可缺之利益。97期15丁オ

ロセフオルという人が「決闘論(割注:原文は血闘という)」を著わして新聞に掲載している。某大使は読み終わりもせずに投げ捨てて言った。「つまらぬ。現代人は決闘をあまりに容易なものと思なしているから社会の笑いものになるのだな。しかし実に決闘とは生死に関係することなのだ。行なうときには当を得ることが必要で、そうであれば後はよい。たとえば罪が万死に当たるものだが法律の及ばぬ者には決闘で決着をつける。この世に不可欠の利益ではないとどうしていえようか」

蘆花の使用した「血闘」とは血を流して闘うこと。決闘と通音する。果し合いと同じ。不記は「血闘」を「併命」に漢訳した。もとは「一緒に死ぬ」という意味。別の単語ならば「拚命」「拚命」も同じく「命がけ、命を捨てる」だ。日本語の「立ち合う」に言い換えることができると理解する。

清末には黒岩涙香『決闘の果』(1891)を漢訳した「決闘縁」(1903)、「決闘会」(1907)、「決闘」(1911)などが小説目録に見える。漢訳単語として「決闘」がないわけではなかった。

ただし『商務印書館華英字典』(癸卯(1903)年四月十四日初版/中華民国四年六月廿日十三版)の「duel」には「両相戦、両相闘、比武」(90頁)とあるだけ。「果し合い」という意味で使用し訳語に「決闘」を当てていない。別の個所に例文として見える「拚命 to risk one's life」(236頁)は命を懸けるである。

別の蘆花「法王殿の墓」で「血闘」(211頁)が出てくる。不記はそれを「力闘」(72期15丁ウ)と漢訳した。やはり「決闘」ではないのだ。

不記は血闘という単語から決闘を連想することができなかった。あるいは清末において決闘という単語が訳語として定着していなかったのかもしれない。それを除いてこの部分の漢訳はほぼ蘆花を直訳している。

不記が変更した小さな個所を指摘する。

蘆花は原作の人物配置を継承している。自分の体験を語る大使がいる。年若い男性がそれを聞いて記録する。小説全体はこのふたりの会話によって展開するという構成だ。

【原作】“And are there such occasions, then?” I responded, in order to see what was in his Excellency's mind. p.43

「それでは、そのような機会はあるのでしょうか」と私は閣下の心中を察するためそう答えた。

【蘆花】『其様な場合があるものでせうか』大使が何思ひつゝあるかを探り見んと、余は斯く応へたり。150頁

原作に見える「I [私]」が本書の書き手であり「his Excellency [閣下]」が大使だ。聞

き書きの体裁をとっているから「私」が主体となる。蘆花は「余」と「大使」を当てた。漢訳はこれらと少し異なる。

【外交報】客応曰。果有此得当之例耶。大使黙黙若有所思。(後略) 97期15丁オ

「はたしてそのように適当な例があるのですか」と某は応じて言った。大使は黙つて思うところがあるらしく(後略)

漢訳「客」は「某人」という意味だ。すなわち不記は第三者の立場で記述している。そこが蘆花とは違う。ただし別の漢訳作品では蘆花日訳のとおり聞き手が述べるものもある。

清末では会話を示すためのカッコ記号を使用する習慣がなかった。そこで発話者の後ろに「曰」「道」などを書き加える。上の不記漢訳については記号を使用して日訳した。

漢訳の検証を続ける。

前述した蘆花日訳のマグラツ男爵についての描写を再引用する。「此男(注:マグラツ男爵)実に腹黒い傲慢無礼の奴で」(152頁)は「其人(注:摩格拉男爵)実一味心無礼之儉[そいつ(注:マグラツ男爵)は腹黒く無礼で粗野な奴で]」(97期15丁ウ)だ。直訳しているといい。

蘆花が題名を「鞭の痕」とした関連個所もあげよう。男爵による何かの無礼に皇后が立腹して乗馬鞭を振り下ろした。

【原作】…… when all at once I saw her Majesty rein in her horse, lift up the riding-whip she held in her hand, and draw it swiftly across his face. p.46

……そのとき突然皇后陛下が馬を手綱で引き寄せ手に持っていた乗馬鞭を振り上げて彼の顔に鞭を素早く振り下ろされたのを私は見ました。

【蘆花】と、陛下は忽ち馬を止めて、持ツ

て居られた鞭振り上げて、はツしとばかり男爵の顔を敲かれた。153頁

【外交報】后忽勒馬。拳鞭痛批其頬。予大驚。97期15丁ウ

皇后陛下はたちまち馬を止めて鞭を振り上げ思い切りその頬をたたかれた。私は大いに驚いた。

漢訳はほぼ直訳である。男爵の頬についた鞭痕についての説明が続く。前述のとおり蘆花の「右の耳から口へかけて、紅の条(すじ)がありありとついて居る」は「其右耳連腮際、血紅縷縷然[右耳からあごまで真っ赤に切れ目なく続いている]」(97期15丁ウ)とする。単語を追加して「血紅鞭痕[真っ赤な鞭痕]」と書けば漢訳題名とつながり一段と適切だった。事実、その後に「鞭痕」を使用している。「と云ふ時、其薄黒ひ面に数年前の鞭の痕ありありと浮み出づるを認めた」に当たる漢訳は「語時、予見其面鞭痕顕然[と言う時、その顔には鞭の痕がはっきりとあるのを私は見た]」(98期13丁ウ)である。

鞭打たれた男爵は憤懣やるかたなく現場を目撃した大使に向かって告げる。

【蘆花】イヤ御目出度ふ。(後略) 154頁

読者は男爵が大使に「おめでとう」と声をかける意味が理解できないだろう。蘆花は説明していないからだ。原文はつぎのとおり。

【原作】‘ I congratulate you, M. l’Ambassadeur, on your good fortune.’ (The scoundrel spoke in French—no doubt for the sake of the double meaning.) p.46

「大使閣下、君の幸運を祝福するよ」
(この悪党はフランス語で話した——二重の意味を持たせているのは間違いない)

皇后に打ち据えられたのはたまたま自分(男爵)であって大使でなかったのは「おめでとう」。ただし状況によっては大使の身の上に起こることもあるぞ、と悪態をついたことを意味する。原文で説明しているカッコ部分を蘆花は省略した。ゆえに日本の読者には男爵がなぜ「おめでとう」といったのか理解不能だ。漢訳した不記もわけがわからなかった。その個所はあっさり省略した。

数年後、大使は舞踏会で男爵に出会う。その時、男爵は大使も見ほれるくらいの美女を連れていた。姪だという。そこに来た皇太子はその美女を連れてどこかに消えて行った。この美女こそが男爵の仕込んだ陰謀の種だったのだ。

大使は皇后から呼び出された。その表情は憂いをおびている。理由のひとつは親しい人の死去がある。

【原作】 Doubtless the sad fate of her relative, the King of Bavaria, had done something to effect this alteration, (後略) p.52

彼女の親戚であるバイエルン国王の悲しい運命がこのような変化をもたらしたことは間違いないが、(後略)

【蘆花】無論これは陛下の御親戚バヴリア王変死の一条が余程さわツたのでもあらふが、(後略) 159頁

【外交報】雖或因其戚巴華連君之變。(後略) 97期16丁ウ

あるいはその親戚バヴリア王の異変によるものであるかもしれないが、(後略)

蘆花が原文のままに表記した「バヴリア王」(Bayern の英語名)はバイエルン王(King of Bavaria) ルートヴィヒ2世(1845-86)を指す。彼は建築と音楽を深く愛し「狂王」と称されて知られる。皇后エリーザベトとだけ親しかった。皇后は妹を王妃として推薦していたとい

う。精神病を理由に廃位されて謎の死をとげた。原文では「悲しい運命 [the sad fate]」にとどめている個所だ。蘆花は「変死」を加筆して翻訳した。日本の読者にはもうすこし丁寧に解説してもよかったのではないかと思う。だが原作が説明していないからしかたがない。

不記は簡潔に漢訳している。

皇后が憔悴する理由はそれよりも皇太子の行状によるものだった。皇太子が男爵の姪と結婚するのではないか。それが悩みの原因だ。社会的に対等ではない人物と結婚(貴賤結婚)したばあい王位継承権者は他に移さなくてはならない決まりとなっている。皇后は王位継承権者としての皇太子を失うことになる。またそうさせることがあの腹黒い男爵の狙いなのだった。

大使は方策を助言した。皇太子は急遽しかるべき王女と結婚する。一方の姪も金満家の伯爵に嫁いだ。それで事態は收拾しそうだった。しかし史実にもとづいた小説だからそうはいかない。

原作は大使の語りと聞き手の会話で成立していることは述べた。そこを省略する傾向が蘆花の日訳にはある。また原文を部分的に間引く。大筋の運びには影響を及ぼさない、重要ではないという考えがあるのだろう。

細かな個所を指摘しておく。

【原作】 In the meantime the only resource which occurred to the troubled Emperor and Empress was to press forward the marriage already arranged for their son, in the hope that he might be distracted from dwelling on his fatal passion for the young Countess Schwartzfeldt. p.58

その間、悩みを抱えた皇帝と皇后に残された唯一の手段は、息子が若いシュヴァルツェンフェルト伯爵夫人に対する致命的な情熱に思いを馳せることから気を紛らわせることを期待して、息子のためにすでに

り決められていた結婚を推進することでした。

「シュヴァルツェンフェルト」とは男爵の姪が嫁いだ相手伯爵の名前だ。ゆえに姪は伯爵夫人となる。下線部分を蘆花は翻訳していない。蘆花は日訳で伯爵の名前には触れていないのだ。日訳と漢訳を示す。

【蘆花】 此方にはまだ皇帝皇后両陛下は取り極めた婚姻を急がず外に手段もないので、早速婚姻の式を行はれた。163頁

【外交報】 帝后痛太子情切。急為完姻。98期13丁オ

皇帝皇后の皇太子を思う気持ちは切実だったから急いで結婚させた。

不記の漢訳は蘆花をより一層圧縮したものになっている。

男爵は陰謀をあきらめない。皇太子と男爵の姪はそれぞれ配偶者がいたにもかかわらず深く愛し合っていた。そこを男爵は利用した。領地の片隅に狩猟小屋「a certain hunting lodge/ 獵屋敷/ 獵館」(p.62/166頁/98期14丁オ)があることを皇太子に教え兩人に駆け落ちの場所を設定したのだ。この狩猟用別荘がある場所がマイヤーリンク Mayerling だ。原作も蘆花もそこまでは書いていないだけのこと。別荘で皇太子と姪が心中しているのが発見された。これが男爵の皇后に対する復讐だ。

男爵は自分が法律の制裁範囲外にいることを承知していた。これを制裁するには決闘による以外にはないと大使は心を決めた。

【原作】 I realised that there are occasions when the duel becomes the most holy of sacraments. p.64

私は決闘が最も神聖な儀式となるばあいがあることに気づきました。

【蘆花】僕は実に血闘また已む可からざるの場合あるを悟つたのである。169頁

【外交報】立意殺此悪賊以謝皇后。98期14丁ウ

この悪党を殺し皇后陛下におわびする決意をした。

不記が漢訳したように男爵と決闘することは確かに殺害することになる。しかし原作の duel に該当する蘆花の血闘を漢訳しなかった。不記が保有する語彙の中には含まれていなかったからだろう。

最後に大使と男爵の決闘場面を比較対照する。

【原作】“I found him in a club to which we both belonged. I offered him a game of piquet, and with a smile, at at the first card he played I said: / “ ‘ Monsieur, you cheated. I saw you mark that queen.’ / “That was all. You see, there was no scandal. There could be no suspicion of any other cause for our quarrel.” / “And the result?” / A faint flush came on his Excellency's face. / “Our encounter was not prolonged. Within ten seconds after our swords had crossed I had passed my blade through his heart—and I have never wiped off the blood to this day.”pp.65-66

「私たちふたりが所属するクラブで彼を見つけました。私は彼にカードゲームを勧め、彼が最初に出したカードを見て微笑みながら言った。 / 「ムッシュ、あなたはいかさまをしましたね。あなたがそのクイーンに印をつけるのを見ました」 / 「それだけだった。また議論になることもなかった。私たちの喧嘩の原因はほかを疑う余地はなかったからね」 / 「それで結果はどうだったのですか」 / 閣下の顔にほのかな赤みが差した。 / 「私たちの切り合いは長く

は続かなかった。剣を交えてから10秒も経たないうちに私は彼の心臓を刃で貫いた——そして今日までその血を拭ったことはないのだよ」

アップワードの原作は大使と男爵が同じクラブに所属していたなどと詳しい。

筆者が幾度か指摘しているとおり大使と青年の会話で物語は構成されている。上の引用文下線部分の「それで結果はどうだったのですか」は聞き手の台詞だ。蘆花は大使の顔色と合わせてそれらを省略した。適宜取捨選択のうえ翻訳している。この部分は大使の語りだけを選択した。

【蘆花】偕マグラツを尋ねると、恰も好し某倶楽部に居た。僕は骨牌を勧める。彼奴咲ツて諾する。彼奴が一枚出すより早く、僕は『君、詐偽をしましたね。君が某クイーンに符徴つけるを確かに見た』。 / 此れツ切りだ、喧嘩の原因は明白、誰も怪む者はない。 / 間もなく立合いとなつた。刃を交へて十秒と経たず僕は一刀に彼マグラツが胸を突通した==して今日までも其血は拭はない」。169-170頁

【外交報】覓摩格拉。与入倶楽部。徼[邀]之博。悪賊笑諾。彼甫出一牌。予即叱曰。詐賊。汝牌有記号。已為予窺破。争論之下。衆初不以為意。未幾相搏擊。予一刀直貫其胸。今視吾刃。血痕猶未拭盡也。98期14丁ウ

マグラツを探して倶楽部に行き彼を賭けに誘った。悪党は笑って承知する。彼がわずかに1枚出したところで私は怒鳴った。「詐欺師め。君のカードには印がついている。私は見破っているのだ」言い合いがあったが人々は最初から気にも留めなかった。ほどなく立ち合いとなり私は一刀のもとに彼の胸を突き通した。私の刃を今見ても血

痕はいまだに拭ってはいないのだ。

原文の「encounter [切り合い]」を蘆花は「立合い」と翻訳した。不記はここにこそ冒頭部分で使用した「併命」を当てるべきだった。そうすれば冒頭と結末でつながる。残念なことだった。

不記の漢訳は書き換え、加筆は行なっていない。ただ文章をかなり圧縮していることがわかる。 罍

薛一諤、冷雲、廖旭人三譯者翻譯
原作鑑定(上)

古二德(César Guardé-Paz)

薛一諤翻譯原作・補記

○《青藜影》新譯小説

(英) 布斯俾原著者, 光緒34年7月初版(1908年8月), 後版有戊申年7月27日(8月23日)印刷, 8月14日(1908年9月9日)發行(插圖三四), 由商務印書館出版, 34章, 89頁, 薛一諤、陳家麟合譯。薛一諤翻譯小説為5種, 皆與陳家麟合譯。筆者於《清末小説から》第120號已經鑑定薛、陳全譯, 并且亦將《笑裏刀》薛、陳翻譯小説原著訂正為R. L. Stevenson著《Kidnapped》。關於此部《青藜影》一譯, 布斯俾確實為Guy Newell Boothby, 但《商務印書館目錄1897-1949》誤列原著為《Farewell Nikola》(出版叢書總目錄, 第95頁)。事實上, 《青藜影》原著為《A Bid for Fortune; Or, Dr. Nikola's Vendetta》, 先刊於《The Windsor Magazine》第1卷至第2卷(1895年1月至11月), 同年由倫敦 Ward, Lock & Bowden出版。原著包括序言, 漢譯缺少, 而雙語開頭對比顯示譯者亦刪減原文幾部分。例如, 《青藜影》原著開頭兩段:

First and foremost, my name, age, description, and occupation, as they say in the *Police Gazette*. Richard Hatteras, at your service, commonly called Dick, of Thursday Island, North

★

『明清小説研究』2024年第1期(總第151期)

2024.1.15

晚清小説域外圖像叙事的興起及其变革 ……紀蘭香
晚唱中的變調: 庚辛禁毀小説運動考論 ……張天星
晚清海洋小説的時代主題与訳介創作
……………王双騰、薛海燕

★

『清末小説から』第153号

2024.4.1

周瘦鵑「百合魔」の底本 ……樽本照雄
蘆花『外交奇譚』の漢訳(上) ……沢本香子
《空谷佳人》翻譯底本考辯 ……馬 文偉

次号の公開は2024年10月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

Queensland, pearler, copra merchant, *bêche-de-mer* and tortoise-shell dealer, and South Sea trader generally. Eight-and-twenty years of age, neither particularly good-looking, nor, if some people are to be believed, particularly amiable, six feet two in my stockings, and forty-six inches round the chest; strong as a Hakodate wrestler, and perfectly willing at any moment to pay ten pounds sterling to the man who can put me on my back. And big shame to me if I were not strong, considering the free, open-air, devil-may-care life I've led.

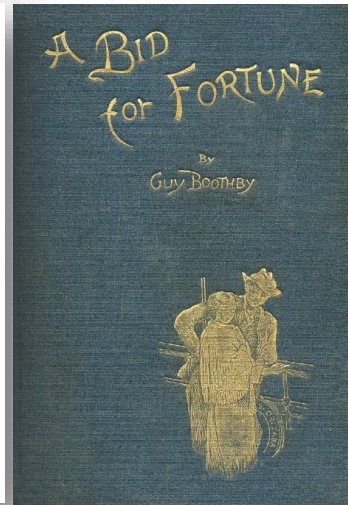
Why, I was doing man's work at an age when most boys are wondering when they're going to be taken out of knickerbockers. I'd been half round the world before I was fifteen, and had been wrecked twice and marooned once before my beard showed signs of sprouting. My father was an Englishman, not very much profit to himself, so he used to say, but of a kindly disposition, and the best husband to my mother, during their short married life, that any woman could possibly have desired. She, poor soul, died of fever in the Philippines, and he went to the bottom in the schooner "Helen of Troy," a degree west of the Line Islands, that same year; struck the tail end of a cyclone, it was thought, and went down, lock, stock, and barrel, leaving only one man to tell the tale. So I lost father and mother in the same twelve months, and that being so, when I put my cabbage-tree on my head it covered, as far as I knew, all my family in the world.

Any way you look at it it's calculated to give you a turn, at fifteen years of age, to know that there's not a living soul on the face of God's globe that you can take by the hand and call relation.

作者曰。余名銳卡得。姓哈特臘士。生於爾斯隊島。余本寡人子。生甫四齡。父母相繼逝。所遺於余者。惟此憂患二字作傳家之恆產。余以採珠爲業。年十五。足跡幾半地球。

儘管如此，所有關鍵詞明確相配〈A Bid for Fortune〉，而與《Farewell Nikola》第一章開頭毫不相關：

We were in Venice; Venice the silent and mysterious; the one European city of which I never tire. My wife had not enjoyed good health for some months past, and for this reason we had been wintering in Southern Italy. After that we had come slowly north, spending a month in Florence, and a fortnight in Rome *en route*, until we found ourselves in Venice, occupying a suite of apartments at Galagheti's famous hotel overlooking the Grand Canal. Our party was a small one; it consisted of my wife, her friend, Gertrude Trevor, and myself, Richard Hatteras, once of the South Sea Islands, but now of the New Forest, Hampshire, England.



插圖一：《青藜影》，1908年初版封面

插圖二：《A Bid for Fortune》，1895年初版封面

翻譯削減如下：

光緒三十四年七月初版

英 國 布 魯 塞 爾
著 者 英 國 布 魯 塞 爾
譯 述 者 江 蘇 一 家
發 行 者 靜 海 陳 一 家
印 刷 所 靜 海 陳 一 家
總 發 行 所 靜 海 陳 一 家
分 售 處 靜 海 陳 一 家

英 國 布 魯 塞 爾
著 者 英 國 布 魯 塞 爾
譯 述 者 江 蘇 一 家
發 行 者 靜 海 陳 一 家
印 刷 所 靜 海 陳 一 家
總 發 行 所 靜 海 陳 一 家
分 售 處 靜 海 陳 一 家

商務印書館發行

說部叢書
小 說 日 報
新 小 說
林 譯 小 說
小 本 小 說

商務印書館發行

說部叢書
小 說 日 報
新 小 說
林 譯 小 說
小 本 小 說

插圖三四：《青藜影》，1908年及1915年版權頁對比

冷雲翻譯原作

○〈劫裏慈航〉短篇小說

(法)大仲馬原著者，刊於《庸言》第1卷第14號(1913年6月16日)，期刊印錯「13號」。原著者即Alexandre Dumas père，原著為〈Le Kent〉沉船故事，集於《Scènes nautiques. Épisodes de la mer. Naufrages》，Alphonse Lebégue出版，布魯塞爾，1852年，80至90頁，後由Alexandre Cadot出版，巴黎，1853年，2冊。1851年拿破侖當選後，大仲馬失寵並離開法國前往比利時。因此，該書先出版於布魯塞爾。

〈劫裏慈航〉雙語開頭對比如下：

Le 1^{er} mars, à dix heures du matin, un magnifique trois-mâts, ses grandes voiles carguées et prises aux bas ris, ses vergues de perroquet amenées, se tenait à la cape sous un grand hunier seul, avec trois ris pris, ses fausses fenêtres de poupe fermées, et tous ses soldats de quart, amarrés à un cordage de sûreté tendu sur le pont, luttant contre un des plus terribles grains qui aient jamais soulevé les vagues gigantesques de la mer de Biscaye.

C'était le Kent, magnifique navire de la Compagnie anglaise des Indes, commandé par le capitaine Henry Cobb et destiné pour le Bengale et la Chine.

三月一號。晨十句鐘。有三桅之船。外象至華美。當其駛至俾司開海面時。巨帆飽風。蜿蜒疊折。勢至低。船藉第二桅之帆以行。帆猛壓者三。船尾被箴。假窗立關。巡兵於船面繫纜。力抗風力。船名為康德。係印度之英公司所製造。船主為亨利古栢。將前赴本加利及中國海灣。

劫裏慈航

三月一號。晨十句鐘。有三桅之船。外象至華美。當其駛至俾司開海面時。巨帆飽風。蜿蜒疊折。勢至低。船藉第二桅之帆以行。帆猛壓者三。船尾被箴。假窗立關。巡兵於船面繫纜。力抗風力。船名為康德。係印度之英公司所製造。船主為亨利古栢。將前赴本加利及中國海灣。

SCÈNES NAUTIQUES
—
ÉPISODES DE LA MER.
—
NAUFRAGES
—
ALEXANDRE DUMAS.

ALPHONSE LEBÉGUE, IMPRIMEUR-ÉDITEUR,
Rue des Jardins d'Idalie, n° 4.
Dessant rue Notre-Dame-aux-Neiges, n° 60.
1852

插圖五：〈劫裏慈航〉第一頁

插圖六：《Scènes nautiques》1852年初版標題頁

○〈一回緣〉短篇小說

(法)迫倭氏原著者，刊於《庸言》第1卷第14號(1913年6月16日)，期刊印錯「13號」。原著者即Marcel Prévost，原著為〈Le première fois〉，集於《Notre Compagne》，Alphonse Lemerre出版，巴黎，1895年，261至273頁。

〈一回緣〉雙語開頭對比如下：

L'ENTRETIEN—vers la fin du repas qui réunissait ce soir-là, chez Durand, les cinq anciens copains de l'institution Masse, devenus cinq Parisiens aux tempes grisonnantes—abordait un de ces sujets qui semblent sortir naturellement des bouteilles de chartreuse et des flacons de fine champagne: la façon dont chacun des convives avait fait sa première épreuve de virilité. Et c'étaient, en somme, d'assez pauvres histoires qui tombaient sur la nappe, l'une après

l'autre, des histoires qui se ressemblaient entre elles, comme se ressemblent les salons de maisons publiques ou les masques plâtrés des guetteuses d'amour.

Pourtant l'aventure que conta Frédéric Autan, le poète ingénieux des *Contes gascons*, ne fut point pareille aux autres.

某夕竺郎家燕客。座上五人。皆故舊之交。酒酣耳熱。咸出所聞韻事。作席上豪談。大抵非說勾欄中事迹。即描寫醜婦作艷妝。以愚尋芳浪子之狀。衆口雷同。不免有病於造作。惟詩家斐德海倭丹所談一則。超然不俗。一篇佳話。若於不期然中。從酒壺菜羹裏躍出者。

promenade des Anglais, au théâtre ou aux courses, ce couple étrange que Paul B... avait baptisé les *Amants d'outre-tombe*. Ils faisaient penser, en effet, à des revenants d'une surnaturelle patrie de l'amour: elle, encore jeune et très belle, par la maigreur de ses membres, la pâleur de son visage, l'indifférence extatique de ses splendides yeux bleus; lui, par je ne sais quoi de juvénile et d'irréremédiablement usé que trahissait sa démarche accablée et nerveuse, le port de sa tête, à la fois exténué et fier. Déjà grisonnant, il eût été beau sans le large bandeau noir qui couvrait l'œil droit et le haut de la joue droite, masquant insuffisamment une moitié de visage corrodée de brûlures.

凡巴黎人於歲暮時。往來尼斯及孟德加洛間者。莫不欲到賽馬之場。戲園之內。或英人遊樂之隊裏。一觀此奇異之雙鴛鴦以爲快。其嶋者。雖非荳蔻年華。而嫣然一笑。風韻猶存。明動眼波。撩人欲醉。肌體瘦羸。顏色黯淡。適足增其臨風婀娜。弱不勝衣之姿態。其雄而飛者。卓犖英姿。和柔中。寓有高尚之概。頭髮頰白。而冠玉之美依然也。

第三十卷第一頁
某夕竺郎家燕客。座上五人。皆故舊之交。酒酣耳熱。咸出所聞韻事。作席上豪談。大抵非說勾欄中事迹。即描寫醜婦作艷妝。以愚尋芳浪子之狀。衆口雷同。不免有病於造作。惟詩家斐德海倭丹所談一則。超然不俗。一篇佳話。若於不期然中。從酒壺菜羹裏躍出者。



插圖七：〈一回緣〉第一頁

插圖八：《Notre Compagne》1895年初版標題頁

○《雙奇偶》短篇小說

(法) 迫倭氏原著者，刊於《庸言》第1卷第14號(1913年6月16日)，期刊印錯「13號」。原著者即Marcel Prévost，原著為《Un couple》，集於《Notre Compagne》，Alphonse Lemerre出版，巴黎，1895年，45至56頁。

《雙奇偶》雙語開頭對比如下：

Tous les Parisiens qui ont fréquenté Nice et Monte-Carlo, pendant la saison dernière, se rappellent pour l'avoir aperçu au Cercle, à la

第三十卷第一頁
雙奇偶
凡巴黎人於歲暮時。往來尼斯及孟德加洛間者。莫不欲到賽馬之場。戲園之內。或英人遊樂之隊裏。一觀此奇異之雙鴛鴦以爲快。其嶋者。雖非荳蔻年華。而嫣然一笑。風韻猶存。明動眼波。撩人欲醉。肌體瘦羸。顏色黯淡。適足增其臨風婀娜。弱不勝衣之姿態。其雄而飛者。卓犖英姿。和柔中。寓有高尚之概。頭髮頰白。而冠玉之美依然也。

插圖九：《雙奇偶》第一頁

○《偷書案》偵探小說

布埃原著者，刊於《出版界》第31號至第

32號(1916年9月1日至10月1日)。筆者雖未見原著，然確信該譯為Edgar Allan Poe著〈The Purloined Letter〉，由夏爾·波德萊爾(Charles Baudelaire)於1856年翻譯成法語，譯名為〈La lettre volée〉(集於《Histoires extraordinaires》，Michel Levy出版，49至74頁)。不僅原著者名字「布埃」與「Poe」法語發音相符(參看《巴黎奇妙命案》原著者，其中音譯為「安蘭布」)，而且譯名即〈The Purloined Letter〉的直譯。此外，《清末民初小説目錄》表明該譯為「法國著名偵探小説」(T1044b*)，而〈The Purloined Letter〉確實關於法國偵探C. Auguste Dupin第三個案件的故事。

廖旭人翻譯原作

○〈獎廉記〉短篇小説

刊於北京《帝國日報》，宣統2年月10月22

日至25日(1910年11月23日至26日)，原著者不記。原著者即Jules Girardin。原著為〈L'homme poudreux〉，先集於Jules Girardin著《Récits de la vie réelle》，Hachette出版，巴黎，1881，174至180頁。

〈獎廉記〉雙語開頭對比如下：

Le vieux Fritz entr'ouvrit respectueusement la porte du cabinet où M. le conseiller Hartmann travaillait à son *Histoire diplomatique du grand-duché de Münchhausen*.

«S'il vous plait, monsieur le Conseiller, dit-il en s'inclinant, il y a là, dans l'antichambre, un homme qui désire parler à M. le Conseiller.

當評議官亞特曼手外交史一卷翻閱於書房中時。老者非忒徐徐推門半開。入俯首低聲請曰。惟評議官。先生垂鑒。有客在廳事中。勾與先生接談。

短篇小説

獎廉記 (閩海人廖氏譯述)

當評議官亞特曼手外交史一卷翻閱於書房中時。老者非忒徐徐推門半開。入俯首低聲請曰。惟評議官先生垂鑒。有客在廳事中。勾與先生接談。評議官曰。客為誰。如人非忒以手掩口曰。余曰。汝為鳥。悉其為浪子。且奚從而知其不足齒數。非忒作傲慢之態曰。襟見則。蒙聖冠如敗絮。散塵在肩。蓬首而洪聲。手一巨杖。先生試思其為何人。評議官曰。沙奚。亦有陳於先生曰。非介之。曰。無介之者。曰。延入見。有巨杖曰。但令人母多言。

客既入。狀老鍊似一老卒而喪氣垂首。復似一勾乞之人。始則故落其杖。觸窗聲。若然。客俯拾杖。非忒椅門立而不。出。若慎防亞特曼之露其慍色。者亞特曼。蹙眉示非忒以眼色。非忒復。前頷。頭若其慍愧者。亞特曼指圖椅使。就坐。椅位置。意。聞日光。聲。然。射。人。面。貧。窶。求。乞。之。徒。已。先。是。客。而。坐。者。未。完。

插圖十：〈獎廉記〉第一期



插圖十一：〈獎廉記〉第二期圖片



插圖十二：〈L'homme poudreux〉圖片

○ 〈黃梁新夢〉

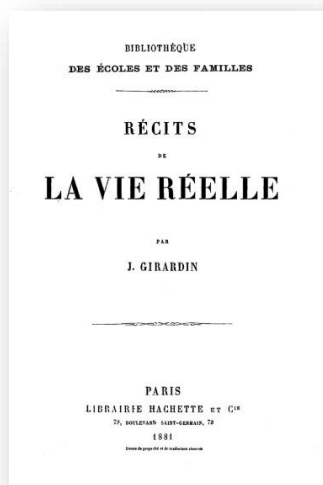
(法)亞爾柏原著者，刊於《小説時報》第14期(1912年1月13日)。原著者即Jules Girardin，原著爲〈Fais ce que tu fais〉，原刊於《Le magasin pittoresque》第47至48期(1879年)，後集於Jules Girardin著《Récits de la vie réelle》(Hachette出版，巴黎，1881，11至40頁)，與〈獎廉記〉相同。亞爾柏可能指法國小説家Edmond About，廖旭人記錯。

〈黃梁新夢〉雙語開頭對比如下：

La leçon d'écriture vient de finir. Le père Chanette, notre vieux maître, regagne sa chaire, le dos arrondi, les deux mains dans les poches de sa grande houppelande. Il tire lentement son vaste mouchoir à carreaux, pour essuyer ses lunettes avant de passer à un autre exercice. Tout à coup il se retourne, replonge le mouchoir à carreaux dans les profondeurs de sa poche, ramène ses épais sourcils sur ses yeux, et s'écrie:

«Ce sera donc toujours la même chose! Conrad, Limousin, Kieffer, pourquoi êtes-vous debout?»

習字功課甫畢。老教師山勒德步回講席。僵僕其背。兩手系入外套之左右袋。未課他科前。徐徐出巾擦眼鏡。既乃倏然回顧。納巾入袋。蹙其雙眉。呼曰。往往如此。貢拉里木聖吉斐。汝三人胡爲離席興。



插圖十四：《Récits de la vie réelle》1881年初版標題頁

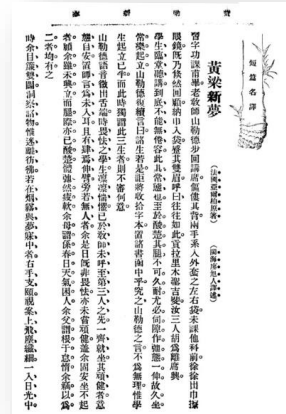
○ 〈賢童王〉

刊於北京《帝國日報》，宣統2年月12月6日至8日(1911年1月6日至8日)，原著者不記。原著者即Jules Girardin，原著爲〈Le Roi des Bons Garçons〉，亦集於Jules Girardin著《Récits de la vie réelle》，Hachette出版，巴黎，1881，105至111頁，與〈獎廉記〉、〈黃梁新夢〉相同。

〈賢童王〉雙語開頭對比如下：

Il y avait une fois, au village de Trentheim, un petit fermier nommé Mayer, qui ne s'était jamais mis en colère. Les garçons et les filles de Trentheim se creusaient la tête pour trouver de bonnes malices et le pousser à bout, mais jamais personne n'avait pu y parvenir. Quand on voulait donner à entendre qu'une chose ne se ferait jamais, on ne disait pas, comme dans les autres pays: «Ce sera pour la semaine des quatre jeudis;» on disait: «Ce sera pour le jour où Mayer se fâchera.»

湯鄂之村有童子曰邁爾業。性和平素無怒色。村中童輩百計。侵凌之激其怒面不動。甚至時人欲例難期之事。不曰。俟之一星期有四木曜日。而曰。俟之於邁爾業有怒容時。



插圖十三：〈黃梁新夢〉第一頁

法國 短篇小說

賢童王 (偶爾加入原其書誌)

賢童王 (偶爾加入原其書誌)
漫輦之村有童子曰過爾業性粗牛素
無怒色中童輩白世凌之激其怒
而不動其至時人欲俾難期事日
俟之一星期有門木囉上而俟之於
過爾業有怒容時

村中號稱殺得者流既無術以然過爾
業即亦置之無可如何且而黃髮駝背
之老石則號過爾業為賢童十毀譽同
尋並主人離測一日午後天氣晴暖
過爾業乘野棹擬過湖一小島上刈獲
豐草甫離岸數武忽聞人聲遙呼曰舟
停過爾業顧之見為村童亞白向湖
隄力奔其女弟萬達尾之亞白遺詢曰
汝何之過爾業曰詣草開亞白我輩
願倍行君其心之過爾業曰是不妨乃
復移舟抵岸二人先後登舟

既抵島上則彼此從事剪刈不虛延片
晷閱一時許亞白曰余二人足矣過爾
業曰余亦足於是相計返岸過爾業以
已係舟主人當讓二客先登而彼則負
草僮僕行履乎其後

萬達擲草舟中從而登焉亞白繼之過
爾業方欲撻路上起二人一躍舟中即
鼓槳前盪舟候進已離於過爾業所立
之巨石上

過爾業仰見舟已推開大駭之且舟中
人格格格不可仰而已則進退維谷頗
覺親頭二人大笑退避遠聲互答但聞
林叢之中礁石之上喧然而礙者皆

笑聲也 (未完)

插圖十五：〈賢童王〉第一期

○ 〈指環記〉

刊於北京《帝國日報》，宣統2年月11月5日至12日（1910年12月6日至13日），原著者不記。原著者即 Charles Perrault（偶爾印錯「Claude Perrault」），原著為〈Peau d'Ane〉童話，先集於 Charles Perrault 著《Le petit cabinet des fées》（Poncelin出版，巴黎，1801，2冊），第2冊，68至99頁，不過底本無明。1866年由Hachette出版《Contes de fées tirés de Claude Perrault》（98至124頁），此版所含有的65圖片可為《帝國日報》插畫家的靈感來源（插圖十六及十八）。

〈指環記〉雙語開頭對比如下：

Il était une fois un roi, si grand, si aimé de ses peuples, si respecté de tous ses voisins et de ses alliés, qu'on pouvait dire qu'il était le plus

heureux de tous les monarques. Son bonheur était encore confirmé par le choix qu'il avait fait d'une princesse aussi belle que vertueuse; et ces heureux époux vivaient dans une union parfaite. De leur chaste hymen était née une fille douée de tant de grâces et de charmes, qu'ils ne regrettaient point de n'avoir pas une plus ample lignée.

有某王者。國富且強。賢明好德。而禦侮之鋒。尤不可當。以故鄰封諸邦咸響其威稜。不敢侵犯境內。稱太平焉王后。有艷色。性和厚。王得后以來。頗自信為世界第一福人。膝下雌母性質美亦如之。故王雖未得儲嗣。而撫弄愛女。亦足以自慰己。

法國 短篇小說

指環記 (加入原其書誌)

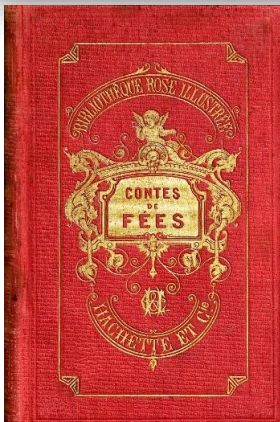
指環記 (加入原其書誌)
有某王者國富且強賢明好德而禦侮
之鋒尤不可當以故鄰邦咸響其
威稜不敢侵犯境內稱太平焉王后有
艷色性和厚王得后以來頗自信為世
界第一福人膝下一雌母性質美亦如
之故王雖未得儲嗣而撫弄愛女亦足
以自慰己

王既富於財宮中一切皆侈靡僕從扈
衛盛服而威嚴又著馬駟駟黃牝牡充
斥不可勝數馬衣之飾亦炫麗奪人目
廐中惟一驢別處遠所每遇人入廐輒
驚耳若誇其能者人莫測其故哈是驢
有賢德故賦性特異雖酒身糞土終不
染垢穢是亦未可知但每日侵晨驢所
處槽標間常有金銀幣在驢人取攜則
又不知其奚來也

詎福無常彼蒼有時雖其保全人類
之意一日后猝犯暴疾勢且不治術師
國手均無所施其技留留時后謂王曰
妾敢以一息尚存請王預定一事妾妾
奄忽在俄頃冀帝之奉王必更擇他人
王曰矧且休息朕終不萌是念(未完)



插圖十六：〈指環記〉第一期



插圖十七：《Contes de fées》1866年



插圖十八：〈Peau d'Ane〉一圖，出於《Contes de fées》1866年

○ 〈拇指兒〉

刊於北京《帝國日報》，宣統3年月1月8日至20日（1911年2月6日至18日），原著者不記。原著者即Charles Perrault，原著為〈Le petit poucet〉童話，先集於Charles Perrault著《Histoires ou contes du temps passé》（Claude Barbin 出版，巴黎，1697），183至229頁，不過底本無明。該童話亦集於《Contes de fées tirés de Claude Perrault》，Hachette 出版，巴黎，1866年，77至97頁，與〈指環記〉相同。

〈拇指兒〉雙語開頭對比如下：

Il était une fois un bûcheron et une bûcheronne qui avaient sept enfants, tous garçons; l'aîné n'avait que dix ans, et le plus jeune n'en avait que sept. On s'étonnera que le bûcheron ait eu tant d'enfants en si peu de temps; mais c'est que sa femme allait vite en besogne, et n'en faisait pas moins de deux à la fois.

Ils étaient fort pauvres, et leurs sept enfants les incommodaient beaucoup, parce qu'aucun d'eux ne pouvait encore gagner sa vie. Ce qui les chagrinait encore, c'est que le plus jeune était fort délicat et ne disait mot: prenant pour bêtise ce qui était une marque de la bonté de son esprit.

某甲者業樵有子七。長者年十齡。最少者僅七齡。甲家甚貧。子少不治業。徒充食指。怒

焉憂之。益以少子質羸弱。不笑亦言。

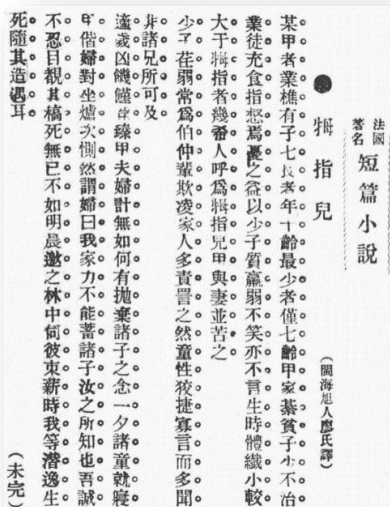
○ 〈裾釵會〉

刊於北京《帝國日報》，宣統3年月1月28日至2月5日（1911年2月26日至3月5日），原著者不記。原著者即Charles Perrault，原著為〈Cendrillon〉童話，先集於Charles Perrault著《Histoires ou contes du temps passé》（Claude Barbin 出版，巴黎，1697），117至148頁，不過底本無明。該童話亦集於《Contes de fées tirés de Claude Perrault》，Hachette 出版，巴黎，1866年，51至63頁，與〈指環記〉、〈拇指兒〉相同。

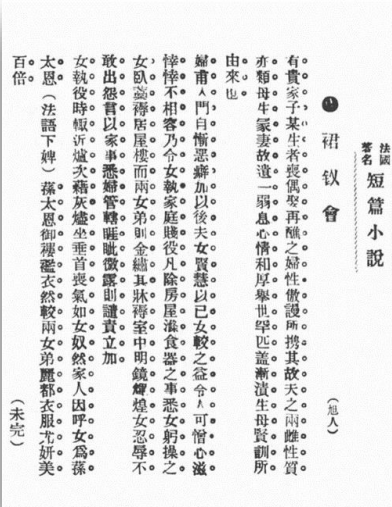
〈裾釵會〉雙語開頭對比如下：

Il était une fois un gentilhomme qui épousa en secondes noces une femme, la plus hautaine et la plus fière qu'on eût jamais vue. Elle avait deux filles de son humeur, et qui lui ressemblaient en toute chose. Le mari avait de son côté une jeune fille, mais d'une douceur et d'une bonté sans exemple: elle tenait cela de sa mère, qui était la meilleure personne du monde.

有貴家子某生者喪偶。娶再醮之婦。性傲謾。所携其故夫之兩雌。性質亦類母。生蒙妻故遺一弱息心情和厚。舉世罕匹。蓋漸漬生母賢訓所由來也。



插圖十九：〈拇指兒〉第一期



插圖廿：〈裾釵會〉第一期

○〈美人血〉

(法)可倫原著者,刊於《民誓》第1期至第2期(1912年11月30日至12月30日)。原著者即 Marie François Goron, 原著為《Mémoires de M. Goron》(巴黎, 1897年, 4冊), 第2冊, 但漢譯僅包括前兩章, 提名為〈Trois cadavres〉及〈Les deux assassins〉。筆者無法存取第一章, 所以祇依靠第二章。

〈美人血〉雙語第二章開頭對比如下:

Le surlendemain du crime, une note du service des garnis nous avertit que, dans la nuit même de l'assassinat de la rue Montaigne, un individu, qui se faisait appeler Henri Geissler, avait disparu d'un hôtel où il habitait, l'hôtel Cailleux, dans les environs de la gare du Nord.

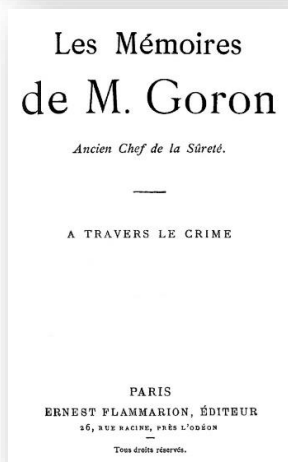
Henri Geissler! Gaston Geissler! L'assassin pouvait avoir facilement changé de prénom. Une heure à peine après la réception de la note du service des garnis, j'étais à l'hôtel Cailleux, et je saisisais, dans la chambre toute simple qu'occupait le voyageur disparu, une méchante valise, un sac en papier qui avait contenu des cigares, un portrait de femme dans un vieux médaillon et des chemises très simples qui, chose étrange, étaient marquées G. G.

第三日租賃家具處。報稱當蒙德街暗殺事出之夕。北車站附近之格伊爾旅館。有住客齊士黎亨利者。不知去向。一為齊士黎姓亨利名。一為齊士黎姓。加實堂名。或者一刺客之易其名者。接報單一句鐘後。余前詣旅館。入逋客所居之屋中。搜得破囊一。雪茄烟紙盒一。婦人小影一。惟汗衫數襲至潔淨。上署齊字加字頗可怪。

四



插圖廿一：〈美人血〉第二章



插圖廿二：《Mémoires de M. Goron》第二冊標題頁

清末小説から

馬文偉氏よりご教示いただきました。感謝

韓 一字○朱樹人《樞者伝》——法国文学早期翻訳
 鈎沈之一 『東方翻訳』2011年第5期(総
 第13期) 2011. 10. 18

張強、孟麗○中国第一部農事翻訳小説——《樞者伝》
 『雲南農業大学学報(社会科学版)』2011
 年5卷第1期 電字版

翁 露哈○『翻訳規範論から見る翻訳者の主体性—
 —『経国美談』の翻訳テキストを例に』
 (日本語) 四川外国語大学修士学位論文
 2016. 4

- 張 仲民○『種瓜得豆：清末民初的閱讀文化与接受政治』北京・社会科学文献出版社2016. 11
- 陳 翼思○『清末民初日書訊介研究』上海師範大學碩士學位論文2018. 5
- 万 千○『《繡像小說》雜誌及所刊小說研究』暨南大學碩士學位論文2018. 6
- 安 婷○『清末民初文明書局小說刊行研究』華東師範大學碩士學位論文 2019. 5. 9
- 張 弛○翻訳“福爾摩斯”与維新視域下《時務報》的說部實踐 『中国比較文学』2021年第1期 2021. 3 電字版
- 姜 国『南社小説研究・初探』長春・吉林大學出版社2012. 6
- 郭長海「序」、
引 言、
第 1 章 時代与叙事——南社由詩文到小説創作的轉變、
第 2 章 異化与歸化——南社的翻譯小説、
第 3 章 醒世与革命——南社小説的愛國觀、
第 4 章 覺世与規避——南社小説的愛情觀、
第 5 章 諷世与变革——南社小説的社会觀、
第 6 章 社团与流派——南社小説家与鴛鴦蝴蝶派、
結 語、
附録 1 南社小説作者名号表（筆名查本名）、
附録 2 南社小説目錄、
参考文献、
後 記
- 龔 瓊芳『林訖小説在近代的傳播研究』武昌・武漢大學出版社2022. 8
- 前 言、
緒 論、
第 1 章 林訖的交往与林訖小説的傳播、
第 2 章 近現代傳播与林訖小説的傳播、
第 3 章 前期林訖小説的傳播、
第 4 章 後記林訖小説的傳播、
結 語、
附録 1：商務印書館出版林訖譯著年表、
附録 2：《小説月報》刊載林訖譯作年表、
参考文献、
後 記

- 張 天星『晚清小説戲曲禁毀問題研究』北京・中華書局2024. 1
- 緒 論、
第 1 編 禁毀主体、
第 1 章 家族、
第 2 章 士紳、
第 3 章 善会善堂、
第 4 章 州県官、
第 5 章 差役、
第 6 章 地保、
第 7 章 警察、
第 2 編 禁毀原因、
第 8 章 從禁令罪責關鍵詞看禁小戲原因、
第 9 章 治安問題对演戲禁忌和管理的推動、
第 10 章 從戲曲案件被禁劇目看禁毀原因、
第 11 章 從小説、彈詞案件被禁名目看禁毀原因、
第 12 章 清代小説戲曲接受中的患癆現象、
第 13 章 庚辛禁毀運動与小説界革命的前兆、
第 14 章 清代前中期与晚清禁毀原因之比較、
本編結語、
第 3 編 禁毀效果、
第 15 章 果報对禁毀活動及文本的影響、
第 16 章 晚清小説創作中的自我禁抑現象、
第 17 章 禁毀小説活動对小説編刊的影響、
第 18 章 演戲酬神对清代禁戲政策的消解、
第 19 章 清末查禁《新小説》的原因与效果、
第 20 章 寧波查禁串客对甬劇發展的推動作用、
第 21 章 上海租界戲園為何能遵守国忌禁戲？
本編結語、
第 4 編 禁毀法制、
第 22 章 上海租界小説戲曲案件審判的特点与影響、
第 23 章 清代查禁小説戲曲刑罰在晚清的近代轉型、
本編結語、
本書結語、
主要参考文献、
附録：本書表格索引、
後 記